

休 場

五時からの会議が流れた。他の仕事の予定も噛み合わず、定時での帰宅となった。前川は、家に電話を入れた。呼び出し音が繰り返される。キッチン脇の電話機から誰も居ない部屋部屋へと鳴り渡っていくのだろう。いつからか、遅くなるという電話ではなく、こうして定時に会社を出る時に、電話をするようになった。そしてこの半年、妻が家で彼を出迎えた日はない。こうして実家に入りびたつたまま、いつしか全くの別居生活となり、離婚することになるのだろうか。

「課長、五番に外線入ってます。休場さんという方です」
現実の声。前川の思いは断ち切られた。

「わかった」

受話器に手を伸ばしながら、記憶の名簿を繰る。珍しい名目だ。思いつく相手は一人だけだ。

「お待ちせしました。前川です」

「覚えてるかなあ、大学の時いっしょだった休場なんだけど」
思った通りだった。すぐに顔が浮かんだ。

「覚えてるけど」

間の抜けた返事だ。

「よかった、じゃあ、話は簡単だ。今夜飲まないか？」

結局、前川はその過去からの闖入者に突然再会の約束させられた。流れた会議と不在の妻のせいだ、と思った。

自動ドアが開く。外から生暖かい風に煽られた。

（そうか、もう冷房が入ってたのか）

正月休みに出社して、妻と揉めた。その前から家にいてもどこか気詰まりで、家のことを考えない言い訳に忙しく働いていたのかもしれない。あれから、五ヶ月、妻とはもう揉めることさえない。こうして、考える時間が出来ると気が重い。

ふと、自分の前を歩く特徴のある後ろ姿に気付いた。水平移動するように、滑らかなで、人ごみに歩調を緩めることなく家路を急いでいる。

（情けないもんだな、こつちはたまに早いとどう過ごしたらいいかと戸惑ってるのに）

残業を断らなくなつたけれど、それでも大方、定時に社を出るその男の背を、前川はどこかうらやましい気持ちで見つめていた。白居明彦。前川の部下である。かなりの長身が人目を引く。何かが心に引っ掛かる。前川の出会ったどんなタイプの人間とも違う。まるでこの世界に住むことに戸惑っているような表情を見せる若者だった。

休場の指定した店は、小さな飲み屋だった。前川の知っていた休場のイメージからは、意外な選択だ。

約束の時間より早く着いた。知らない場所へ行く時には、いつもかなり早めに家を出る。そうした常識的な所が、世間に出

て、随分役に立っている、と思う。順調な時は、そういうモラルを人にも押し付けた。部下には、厳しいが頼りになる上司だと言われた。が、家がうまくいかなくなってきたからは、そうした自分が鼻につく。地方から、東京の国立大に入り、中小ではあるが、上り調子の会社で出世の道を歩み、田舎で教鞭を取っている父母にとつては、自慢の息子である。だが……。

先に飲み始めることにした。考えはどうしても、この突然の電話の意味する所となる。大学で同じゼミだったが、たいしたつきあいではない。個人的に好き嫌いを感じる程会話したこともない。彼が前川の存在を覚えていた、いや、存在を知っていたこと自体が意外である。

前川にとつて休場は、十分印象深い人物だったが。

父親は建設省のおえらいさんなのだ聞いた。良い家のお坊ちゃん、幼稚園から高校までエスカレーター式の某有名私立校にいたが、父親に反発して国立大を受験したのだそうだ。周りの学生も教師も、頭の回転が良く、反骨精神のある彼を好ましく思っていた。アウトローを気取りながら、そのもとにある育ちの良さ、どこか人を安心させる素直さが彼にはあった。

前川の心のトゲとなつていたのは、その素直さに対する僻みだったのかもしれない。前川は、田舎で両親と兄妹に囲まれ、安穩に暮らしていた。東京に出た時のカルチャーショックは大きかった。そして、それは休場に出会って具体的な形を取った。前川が必死でラジオを聞き、英和辞典を繰って覚えた英語を、

休場は海外の叔父や叔母の所へ遊びに行つて覚えたと言っていた。クラシックコンサートに付き合わねばならない、と嘆きながらも指揮者・演奏家・曲の背景などを実によく知っている。趣味でチェロを弾く彼の耳は、前川には信じられない程、様々な音色を聞き分けた。乗馬を教える欲しいと頼まれているのを見たこともあった。

そういう世界もある、ということが心のトゲになっていた。その世界の住人は、奢つた所のない、体制に反発する一人の若者だった。余計、前川はこだわりを持ってしまった。

店の玄関が開いた。振り向く前川に、軽く手を上げて合図する。

「待ったか？ 呼び出しといて悪かったな」

休場は、身軽く前の席に座つた。

「仕事の方どうだ？ 忙しいか？」

おしぼりで手を拭き、せわしくお品書きに目を通す。

「まあまあかな」

「まあまあなら、いいんじゃないか。この頃相当大変だからな」
八年ぶりだというのに、昨日も会つていたようななれなれしさで話す休場だが、ビールをついで乾杯すると

「正直、覚えていてくれるかどうか心配だったんだ。覚えてるつて言われてほつとしたよ」

あのクラスで、自分のことは忘れられても、休場のことを覚えていない奴はいないだろう、と前川は思った。思つても口には

出せなかった。それをなんのてらいもなく口に出す、この素直さが苦手なのだ。

前川が勧めるとたて続けに杯を空けた。かなり強くなっている。日に焼けて、表情も筋肉質に引き締まり、頬が削げた分、印象が荒っぽくなった。話の先に二、三、共通の友人の近況などを話題にしたが、前川の方が待ちきれず切り出した。

「で、用事ってなんだ？」

「用事って言うほどのもんじゃないんだけど、まあ、昔の友人と飲んでみたくなつたっていうんじゃないか？」

「昔の友人ねえ。俺より親しかった奴はいっぱいいいだらう。なんで俺なんかと今更そんなこと思うんだよ」

休場の口元に苦笑いが浮かんだ。前川の休場に対する今までのイメージを払拭するような暗い表情だった。

「そうか、まあそうだよな」

休場は笑った。

「でも、普通そこまで言うかな。おまえって昔から正直な奴だったよな」

その素直さを嫌っていた相手から、正直な奴だと評されるとは、思ってもみないことだった。

「忙しい中付き合ってもらってるんだ。じゃあ、取り合えず用件を言うよ」

休場の目が真っ直ぐ、向けられた。

「会社に白居明彦っていう奴がいるだろう。彼のことを知りた

いんだ」

「知りたいって何を？ お前、商売替えて私立探偵でも始めたのか？」

(商売？)

「そういえば、休場の仕事は？ 卒業の時、公務員になったと聞いた。反発していると言いながら所詮、父親の七光で出世コースに乗るのだろうと思つた。」

「親父さんと同じ建設省にいるのか？」

「さすがに、噂もここまで届いていないか？ 親父、自殺したんだ。俺も辞めた」

(ああ！)

突然、前川の頭の中で、いろいろなことが繋がった。去年の新聞、建設省の休場という文字を見た時、珍しい名字だけにすぐに彼のことを思ったが、歳も違っていたし、そのまま忘れていた。父親とまでは、思い至らなかった。どんな記事だったろう。確か汚職……収賄の罪に問われて、検察の手が入ろうという矢先の自殺だったのではなかったか。

「それは」

「今更、御愁傷様で、なんて間の抜けたこと言わないでくれ。

まあ、というわけで、ご推察の通り私立探偵とまでは言わないが、ルポライターなんて商売を始めたんだ」

「……」

前川は、返す言葉が見つからなかった。確かに、お役所勤め

という雰囲気ではないが。

「まあ、女房子供がいる訳じゃなし、何ってやりたいほどのこともなし、フラフラしてるのを拾われてさ」

「なんで、白居のこと調べてるんだ」

「知ってるのか？ 同じ会社ってだけで、知ってるかどうかと思ってるんだけど」

「俺の部下だからな」

「へえ、そりやラッキーだ」

スツと暗い表情を引つ込めると、昔と変わらない屈託のない笑顔になる。

休場は、明彦の姉のことをノンフィクションで書く為に、いろいろ取材しているのだと話した。

「よくわからないなあ、なんなんだい、その白居の姉さんっていうのは？」

休場は、彼女の関わっている『サクヤ』グループについて説明した。『サクヤ』という名称では、あまり知られていないが、その傘下にある事業のいくつかは、日本中殆どの人間が知っているに違いない。人の記憶に止まった最初はファーストフードの店だったろうか。化粧品店だったろうか。チェーン展開してどんどん広がりがちながら、ターゲットとする年代を絞って細分化し、それとともに様々な分野に飛火した。

「ふうん」

休場の説明に耳を傾けながら、前川はどうも納得のいかない

自分を持って余していた。

休場は、前川と別れてから、しばらくぶらぶら歩いてみた。

前川には、原稿の依頼があつて取材しているかのよう話したが、この企画はどこに持ち込んでも断られた。経済誌で著名人をインタビューする仕事を始め、何度かこの『サクヤ』というグループが触手に触れた『サクヤ』が出資しているものには、一定のパターンがあるような気がする。それにしても、わずか十年でよくもこれだけ手を伸ばしたものだ。彼女の靈感のお蔭なのだろうか？ その上彼女のカリスマ性は、人の口を重くしてタブーの意識を植え付けるのかもしれない。驚異の躍進を果たしながら、それが人の話題に上ることが少ないのは、全く不思議だった。

しかし、休場もまた、結局一番肝心なことを、前川に話さず終いだった。白居葉子と出会ったあの日のこと。父の未来を見た女性。まだ、誰にも話せないでいる。話せないからこそ、何かを見極めて書きたいのかもしれない。何が出てくるかはわからない。でも、彼が今仕事で書いている立志伝のようにならないことだけは確かだと思つた。

一体、白居葉子の目には、何が見えているのだろうか。

予 見

早朝から花束が届けられた。伽耶子が、姉の葉子にそれを見せると

「こんな朝早くに届けさせるなんて、花屋さんもいい迷惑よね」と言いながら、メッセーじカードを手にとって眺めた。

『誕生日おめでとう 我が女神の健康と繁栄を祈って！ 笹原』

「全く、つまらない所に律儀なんだから」

伽耶子は可笑しかった。つい昨夜、仕事のことで葉子にはない笹原のそういう木目細かさが助かると誉めていたのに。

「奥の床の間に活けておいてくれる？」

「はい」

花を持った伽耶子は、廊下で明彦と行き会った。

（笹原さんから？）

短かい問い。兄の驕奢な花に対する悪印象が見える。

「うん」

伽耶子は頷いた。それ以上は、聞かれなかった。

葉子は花を贈るなどという行為は好まない。兄は、姉が『そういうことは好まない』と言えば、決してしないタイプの人間だ。この家には誕生日を祝うという習慣もない。日常と違う晴れの日を作ることを葉子は嫌う。もし、花を選ぶにしても、こんな風に豪華で派手なものを選ぶとは思えない。けれど、兄の中には、笹原のようでありたいと思う部分もある。いつも軽薄

そうにズケズケと物を言い、誰にでも親切そうに振舞い、でもだからこそ人とのコミュニケーションが取れる。姉を遠くから眺めるのではなく、最も近くにおいて、様々な形でサポートし、信頼される。

その日、葉子の帰りは十一時近かった。

「少し歩きたいから」

家の近くで車を降りた。

「ここで待っていてくれ」

笹原は運転手に指示すると、後を追った。

「もういいわよ。すぐそこだよ」

「夜、女性の一人歩きはあぶないよ」

「あぶないような年じゃないわ」

「君ほど魅力的な女性はいないよ」

「ありがとう」

葉子はゆつたりと微笑んだ。

「やっぱり、多田産業の件は納得いかないよ。もう少し……」

「私が大丈夫って言ったら、大丈夫なのよ」

「わかっている。でも」

葉子の言葉は確かに今まで外れたことがない。けれど一〇〇パーセントは一度ははずせば、一〇〇パーセントではなくなり、二度と一〇〇パーセントに戻らない。その初めての誤算がいつ来るのか。果たして一生来ないのだろうか。

「心配なんだ、君がいらいぬ敵を作るんじゃないかと」

「夕飯食べ損ねたね」

葉子は笹原の懸念をはぐらかした。

「だから、今日は誕生日用に予約しておいたって言っただろう」

「ダメ」

「毎年断られてる」

「それでも、毎年予約してるわけ？」

「どうせ俺はしつこい男だよ」

「誕生日には私にとって大事な儀式があるの」

「儀式？」

笹原の疑問に、ふと葉子の表情が曇る。

「やめようかな、儀式なんて」

滅多に見せることのない弱気な笑み。

「やめとこう！ やめとこう！」

笹原が、肩を抱き寄せてUターンしようとする、スルリと

その腕を擦り抜けて、門の所まで走った。そして振り返る。こ

こを訪れた時、何度も、こうして振り返る彼女を見た。いつも

冬木立のように、一人で凜と立っている。

「不思議だよな、どれほどの物を手に入れても、君はちつとも

変わらない」

笹原の感慨などおかまいなしに、葉子は手を振る。

「また、あした」

さっさと中へ入ってしまった。取り残された笹原は踵を返し

て、今登って来た坂道を下る。

『愛人』などという変な言われ方をするようになって久しい。

別に気にはならなかった。葉子と自分と妻の距離を、世間的な

ものさしで測るのはむずかしい。葉子を自分の手に入れる、そ

う表現するのも憚られるが、手に入る女性ではない、それを誰

よりも知っているのは自分だと変に自負していた。

彼女がこのわずか十年間に築き上げた財産。それに比して変

わらぬ生活ぶり。何億もの仕事に対する決断も、社員のプライ

ベートな悩みも、まるで同じ線上にある出来事のように対処す

る。彼女独特の倫理感を持って。

車に乗り込もうとして、ふと、見上げた空に月はなかった。

伽耶子は完全に捕まっていた。手も足も、呼吸することさえ、

ままならない。夢なのは、わかっていた。でも、この夢に殺さ

れるかもしれないと思った。夢の中には、何もなかった。光は

おろか、闇さえもなかった。自分の叫びが、その中に吸い込ま

れて行く。それでも、恐怖に八つ裂きにされないためには、叫

び続けるしかなかった。

頬に痛みが走った。これは救い。自分の存在を確かめられる。

「ああああああー」

やっとな喉を、声が通って行く。

「伽耶子！」

兄の声。目から光が差し込んで来る。肺にどっと空気が入って、意識が戻った。

明彦の手が、強く伽耶子の手首を掴んでいた。

「兄さん」

伽耶子の唇が動く。

「どうしたんだ」

兄の目が、のぞき込んで来る。

「息をしてなかった」

明彦に取りすがって泣きじゃくる伽耶子は、兄のほっとした表情に首を振って訴えた。

「ちがう！ わたしじゃない」

「何が違うんだ」

両手で伽耶子の肩を掴んだ。

「姉さんが」

次の瞬間、明彦は葉子の部屋に向かって走り出していった。

「姉さん！」

明彦は障子を開けると、転がり込むように部屋に飛び込んだ。

葉子は、部屋の中央に敷かれた布団の上に座っていた。明彦が電気に手を伸ばすと、

「点けないで」

葉子は止めた。感情の全く見えない、ぞっとするような声だった。

「姉さん」

「……」

明彦は、どうしようもなく、ただ立っていた。何かが起こったと感じても、姉の指示する言葉がない。

いつのまにか、伽耶子も廊下に来ていた。

「姉さん」

「ごめんさいね」

やっと、姉らしい声で返事が返ってきた。

「自分がこんなに情けない人間だったなんて」

葉子が立ち上がった。幽霊のように、たよりない足取りで伽耶子に近づくと、手を取った。

「ごめんさい。怖い思いをさせて。ばかね、自分がこんなに弱いつてこと、今の今まで気付かなかった」

伽耶子は、何を答えることも出来ず、泣いている。

明彦にとって、なんの收拾もつかぬまま、沈黙が続く。伽耶子は、その特殊な能力で姉の心に起きた何かを感じた。恐怖を共有した。二人の女には、共通の理解がある。けれど、それを口に出さない。出す勇気がない。明彦は、なすすべもなく見守るばかりである。

やがて、伽耶子の泣き声も小さく消えていった。

葉子は、明彦と伽耶子を座敷に座らせた。そして、二人の前に自分も居住まいを正して座った。毅然とした態度はいつもと

変わらない。でも、何かが不安定だった。

わざと遠回しに話の口を切る。

「子どもの頃、自分には他の人と違う能力があることに気付いた。ちようどそれを使つてみたくて仕方なかった頃があつたの。

十歳の誕生日の時、ふと十一歳の誕生日を迎えている自分が垣間見えた気がした。漠然とした未来を予知することは難しいわ。でも、そうして時も場所も絞れば、感じる事が出来る。

十二歳、十三歳、私は、誕生日の夜には、必ずここで自分の未来を見た。十四歳の時には、はつきりと十五歳の誕生日をここで占う自分の姿が見えるようになっていた。その本当の怖さに気付いたのは、二十歳を過ぎてから。でも止めることは出来なかった。

この部屋に、まるで時を映す鏡があるように幾重にも残る残像の中で私は誕生日を迎え続けてきた」

明彦が固唾を飲んで、聞き入っている。不安が伝播してきて、耳を覆いたい。

「そして、ついに最後のくじを引き当ててしまったの」

「最後のくじ」

明彦は、問い返した声が自分の声とは思えぬほどに乾いて聞こえた。

「来年の自分がいなかった」

沈黙と鼓動。妹は怯えきっている。

「間違いだ」

明彦が、声を振り絞った。沈黙が肯定へと導くのに抗う。

「来年は、この場にはいないだけかもしれない」

姉は反論しなかった。

「そうね」

やさしく返事を返す。それが、そんな事は有得ないという彼女の確信に聞える。明彦の聞きたかつたのは、そんな返事ではない。

「どうしたらいい。どうしたらそんな未来を壊せるんだ！」
握り締められた明彦の拳を、葉子の軟らかな手が包んだ。

「明日考えましょう。ね、今日はもう遅いわ」

無理矢理二人を部屋から送り出して、葉子は布団に座り込んだ。二人の前でなら冷静でいられた。いや、冷静を装えた。でも本当は……。葉子は自分で自分の肩を抱いた。呼吸が苦しくなってくる。怖い。ただ、ただ、怖い。

死を思う。この思考のすべて、存在が消えるということの実感。誰も味わえない、生きている限り誰も味わうことのない死の実感。それが、悪夢となって葉子に襲いかかる。葉子が知ってしまったのは、自分が存在しないということの実感なのである。誰に何の答えを出すことも出来ない。誰に話すつもりもなかった。なのに、隠せなかった。年月をかけて作り上げたはずの、自分の心の覆いからやすやすと恐怖はこぼれ出て行った。そして、伽耶子を恐慌に陥れた。

じつとしていられなくなつて、葉子は立ち上がった。障子を開け、雨戸を開けて、外に出た。視線を感じた。月明かりの向こう、森の木の淵に明彦が立っていた。外は春とは思えぬ肌寒さだった。葉子は、弟に気付かぬふりをして、すぐに部屋へ戻った。布団に戻つても眠ることは不可能だった。眠りという無防備さの中で、彼女は恐怖から開放されるのではなく、追いつかれてしまう。再びあの恐怖を味わうというその思いだけで、心が死にそうな悲鳴をあげる。

彼女はもう一度外へ出てみた。やはり明彦は同じ所にじつと立っていた。葉子が手招くと躊躇っていたが、やがてゆっくりと彼女の方へ、歩き出した。

森の陰から抜けて、月の光の下を通過して来る。白い狂気の光。漆黒の柔かな髪、艶やかな肌、長い四肢。その光を纏うことゝなんと似合うことか。

葉子は、明彦の頬に触れた。冷たかった。

「こんな……朝までここに立ってるつもりだったの？」
弟は頷く。

「いつなのか、わからないのよ」

人事のように葉子が言う。

「明日も、明後日も……」

明彦はそれ以上どう言ったらいいのか、口籠もった。

「次の日は？」

揶揄するような葉子の問い。

「その次の日も、その次の日も」

明彦は必死に言い募った。そして、蒼白な顔で唇を嚙締めたまま俯いてしまう。

「ごめんさい、こんなこと、口にする方が馬鹿げてる。とにかく、中に入りましょう。こんな所に立っててもしょうがないわ」

二人は、再び部屋に戻った。

「姉さん、どうしたらいい？ 何が出来る？ 何をしたらいいんだ！」

「そんなこと、わからない」

「怖くないのかよ！ わからないじゃすまないんだ！ どうにかしなくちゃ死んじゃうってことだろ！」

投げつけた言葉の刃に弟自身が震えていた。

「怖い」

葉子の答えは素直だった。それきり言葉は途絶えてしまった。夜のしじまにはお互いの存在を意識する神経の冴えだけがある。

やがて動いたのは、明彦だった。唐突に手を伸ばし、葉子の顎を上げた。目が合う。涙があった。途方に暮れた少女のような顔。引き寄せて抱きしめた。小さい。

姉は明彦の手を振りほどこうとした。弟は、無言のまま強く抱いた。

「これは、しつぱ返しなのよ。未来を覗いて、多くのものを手

に入れた。神様はほんの少しだけ見逃して下さい。それなのに、私はこの力を使い続けた……手痛いしっぺ返しだけ……自分でも情けなくなるほど怖いけど……。

樹 医

こうして怖いなんて口に出していられるうちはいい。一人で見ってしまった未来に向き合うと、今すぐ殺して欲しい」

「そんなこと！ しっぺ返しなら俺が受ける。だって、姉さんにそんなことをさせたのは俺たちなんだから。ずっと頼ってきた、ずっと……」

本当にそうだ。三歳で母を亡くしてから、幼い明彦の手は、いつも姉につながれていた。父が死んだ時も、姉は二十歳。今の伽耶子と同じ年だ。押しかける債権者相手に朝まで一步も引かずに、この家を守り通した。この居場所を必要としている弟妹の為に。今の自分より、年下だった。凜とした姿を覚えている。

「今度は俺が守るから、命に代えても守るから、怖がらないで」
明彦は、葉子に唇を合わせた。うわ言のように囁き続ける。

「怖がらないで、震えないで」
壊れ物を抱きしめるように明彦は姉の体をその腕に包み込んだ。静かに押し倒す。首筋へと、唇を這わせていく。姉に染み込んだ恐怖を拭い取りたかった。この人が辛い思いをしている、それは、彼の心臓を締め付けた。柔かな胸、すべらかな腰、熱い下肢。彼は、自分の唇の下でその肌が、現実を脱ぎ捨てていくのを感じた。

前川は、朝一番に出社していた。深夜まで自分なりに休場から聞いた話を調べて見た。布団に入つてうとうとしたが、明け方一度目が覚めるともう眠れなかった。

もともと前川は、早くに出社するタイプだった。が、課長という立場になってからは、そういう上司は部下にとって煙たいだろうと気を使った。

しばらくすると女子社員が出社して来た。前川の姿を見て、挨拶する。確か、飲み会の席で彼女から聞いたのだ。白居がいつも一番に出社していると。

「まあ、帰るの早いから、罪滅ぼしじゃない」
という彼女の言葉に

「その日本語の使い方は間違ってるぞ」
と、酒の入りすぎた係長が絡んでいた。

前川が今朝早く出てきたのは、白居とふたりきりで話すチャンスを持つことを期待したからかもしれない。

「おはようございます」
「おはようございます」

おしゃべり雀たちが入ってきた。途端に静けさが消えて、朝の騒々しさがやってきた。昨夜のドラマの話、サッカーの勝ち

負け、今会社の前にいたダサイ男の話、今日開店のケーキ屋の前評判。次から次へと喋り捲るうちに、ふと、いつもと違う机に気づいた。そこにいるはずの人間がいない。

「トイレにでも行ってるんじゃない？」

「長すぎるでしょ」

「あら、ホントまだ来てないみたい」

「ねえ、もしかして、私、入社以来初めてののような気がする」

今年入社した新入社員が言った。

「あたしだって初めてな気がする！」

入社二年目の女子社員が声を上げた。

「へえ、ほんと！」

「何が初めてなんだ？」

前川が声をかけた。

「はあ、なんか、朝来て白居さんの座ってない机見るのって……」

そこから女子社員たちの話題は白居明彦の周辺を巡り巡った。が、もちろん、『サクヤ』グループにはつながらない。彼に対する人物評が中心になっている。男性社員より幾分好意的なのは、彼の風貌によるところが大きいのだろう。

確かに、勤務表を見ると、彼は入社以来、無遅刻無欠勤であった。それが今朝は結局、始業時間を過ぎてても姿を見せない。

前川は、幾度となく、白居明彦の机に視線を注いだ。しまいには苦笑していた。

(まるで恋愛中の女子高生だ)

そうは言っても、自分が明彦のプライベートを知ってしまったことが、彼が姿を現さないことに無関係だとは思えなかった。(馬鹿馬鹿しい。昨日、休場と白居の話をしたことを、どうして奴にわかるってんだ！)

打ち消してみても、一年半無遅刻無欠勤だった男が今朝は姿を見せないのである。

「課長、白居さんから二番です」

急いで受話器を取った。二番を押す。

「はい、前川です」

「白居です。すみませんが、今日で社を辞めさせて頂きます。突然無理を言ってますみません。いろいろありがとうございます。た」

前川がなんの返事をする間も与えず、電話は切れた。いや、時間があってもこの一方的な物言いでは返事のしようもない。

(逃げられた)

その思いが強かった。あまりにタイミングが良すぎた。彼の正体を知った途端に逃げられた。でも……なんなのだろう。その正体というのは？ 別に指名手配されてる訳じゃあるまいし。

昨日、帰りに見かけた白居明彦の後ろ姿が思い浮かんだ。すれ違う人々に一切視線を向けることなく、都会の喧騒の中を、まるでただ一人、逆の方向へ立ち去って行くような後ろ姿だった。

秘書から葉子のもとへ行くように言われた。常に、連絡はとっているが、それは主に笹原から葉子へ向けたもので、こんな朝一番から訳も分からないまま呼びつけられたことはない。折り返し電話をかけたが、『来てから話す』という、にべもない返事だった。とにかく駆け付けろしかない。

(いったいなんなんだ。理由ぐらい言ってくれよ)

少しの間でも葉子のことは不安になる。駐車場までの廊下を、不審な目を向けられながらも走った。そう言えば、去年もこんな風にあせって走らされた覚えがある。父親の自殺のことで押しかけてきた男が葉子のもとへ向かった時だ。

車に乗り込んで運転手にも、とにかく飛ばせ、と指示した。

中学生の頃、「親子は一世、師は三世」というのを聞いて、随分乱暴なことわざだと思った。でも、今の自分はこれに似ている。自分から繋がるすべての絆で、最も断ち切られるのを恐れているのは葉子との絆だ。もし生まれ変わっても、何度生まれ変わっても、葉子のもとに止まりたかった。葉子の下僕でありたかった。

白居邸へあと少しという所で、笹原は車を止めた。大きな荷物を背負った大男を追い越した時、それが友康であることに気が付いたのだ。

「乗れよ」

笹原が言うとうちは隣りのシートに座った。無表情を通り越し

て、怒っているように見えるのは、いかつい風貌のせいで、友康も笹原と同じように動揺しているのだと思った。普段だったら、笹原の勧めに応じて同乗してくるような男ではない。

「葉子さんが連絡したのか？」

笹原の問いに

「明け方、電話があつた」

男は端的に答えた。

(俺は二番目か)

まず、葉子は友康に電話して、しばらくしてから自分のことを思い出したのだと思った。その連絡も直接ではなく、会社の秘書に伝言するという形で。

「どこにいたんだ。その時間で今じゃ、近くにいたんだな」

今年の初め、東北にいと聞いた気がする。しかし、男はそれには答えず、

「何かあつたのか？」

「わからない。昨日は普通だったと思う。いや、違う、何て言うてただろう……」

「帰っていれば良かった」

「彼女にしては、珍しく弱気で……儀式がどうのつて」

「誕生日は、いつだって心配だった」

「何か知っているのか？」

葉子のことは友康の方がよく知っている。

車は白居邸に着き、友康は何も答えぬまま車を降りた。

『友康!』車の音が聞えたのか、男の名を呼んで明彦が玄関から飛び出して来た。子犬が飛びつかんばかりの勢いで、明彦は友康を出迎えた。笹原はこういう時いつも舌打ちしたいような思いに囚われる。どうしてもなつかない子犬を絞め殺したくない一瞬だ。

しかし、今日はそんなことには関わってはいられなかった。明彦の様子に、久し振りの友康を出迎えるといったのどかさはない。後ろに立っている伽耶子に至っては今にも倒れそうなほどに青ざめていた。

葉子は離れの外に立っていた。いつもと変わらぬ様子で二人を出迎える。弟妹は、寄って来ない。庭の向こうの離れた切り株に座っている。笹原は二人が葉子の話の聞こえる、そのずつと先に避難しているように思えた。

「昨日私は、私の一年後を見たの」

なんの前置きもなく話は切り出された。葉子は、淡々と話す。笹原は、内容の重さを聞き逃してしまっただけだ。

葉子の予見は外れたことがない。二人の聞き手は余計なことは聞かなかった。彼女の能力を最も知っている二人だ。

葉子がこれで話し終えたとはかりに、言葉を切った。ぼんやりとした視界の先、庭の向こうからいつのまにか明彦と伽耶子は姿を消していた。

(葉子の話の外に避難している。なるほど、その通りだった訳

だ)

笹原は自嘲するように思った。葉子を失う話を聞く勇気が、あの弟妹にあるとは思えない。頭に空白な部分が広がり、考え続けているのに、何を考えているのかわからなくなる。堂々巡り。

「少し時間が欲しい……」

笹原はへたり込むように近くの庭石に座り込んだ。葉子を見ることが出来なかった。

葉子は離れに戻って行く。後を追いかける友康の足音が聞こえた。

タズは、今朝いつものように屋敷の掃除を始めていたが、すぐに何かを感じた。もちろん、明彦が会社を休んでいるだけで、十分変だったし、伽耶子の様子もどこかぎこちなかった。そのうちに友康が笹原とともに帰って来て、葉子の離れに引きこもってしまった。

玄関の引き戸が、うまく動かない。この古い屋敷は、タズの体と同じで年の分だけあちこち自由がきかない。友康が帰って来たら直してもらおうと思っていたのに、とてもそんな雰囲気ではない。

二十数年前、初めて旦那様が友康を連れて来た時、『死んだ友人の知恵遅れの子を預かった』と説明された。それ以上のことは誰も知らなかった。まだ中学を終えるかどうかの年だろうに、

学校には行ったことがないという。この家の一番羽振りの良かった時代で、十人以上の雇い人がおり、なんとなく紛れてしまった。主人は全く無関心で、それきり友康の待遇に触れもしなかったが、この小さな世界でそれなりに生活が始まった。友康は体格が良い。庭仕事や屋敷の修繕、買い物など、雇い人達に言いつけられる仕事をよくこなした。失敗しても、返事さえろくにしなくても、知恵遅れじゃあ仕方ないと咎められもしなかった。

それが、旦那様が亡くなつて、一人二人と雇い人達が去つて行くと、友康の存在が見えてきた。何も言わず葉子を助けている。誰にもなつかないあの不思議な二人の弟妹も、友康にだけは心を開いている。いや、この家の住人だけではない。並外れて広い敷地の木一本一本を信じられないほどの忍耐力を持って手入れする。研究者が訪れるほど、この庭には、価値のある珍しい植物があるらしい。近頃では、そうした研究者たちのネットワークなのか、枯れそうな木を救う団体や個人の依頼を受けて、全国をあちこちらへと出かけて行く。何が友康の考える所なのか、望みなのか、タズにはわからなかったが、友康もタズと同じ心を持っていると感じるのだ。

タズにとつて、ここは主家と言つてもいい。いまだきそんな時代がかつたことを言つたら笑われそうだが、理屈ではなく、タズの心はこの屋敷とその住人に仕えている。

十二歳でこの家に来た。十一人兄弟の十番目は、小学校を出

るとすぐ奉公に出された。やがて父母が他界して、長男に代替わりすると、家に帰ることもなくなつた。ずっと他人の中で生話し、結局自分で家族を作る事もしなかった。葉子の父を子守りし、葉子を子守りした。ここだけがタズの居場所だった。

日が暮れる。葉子は、帰りたがらない笹原に山のような用事を言いつけて、帰した。

『時間がないんだから』葉子が会話の端々に使うその言葉に笹原は逆らえない。いや、もともと彼女の言葉に逆らおうと思つたことなどなかった。部屋を出る時、友康と目が合った。いつもの表情のない目。

(でも、今はその方がいい。自分はどうかろう、縋るような目でもしているのだろうか。あれきり、二人の弟妹は姿を見せない。ずっと、葉子に頼りきつた二人の存在を、ある意味第三者的な冷たい視線で見ている。けれど、結局自分もなんら変わらない。葉子がいなくなつても、自分は生きていけるのだろうか?)

夜、伽耶子は布団に入つてから、奥の廊下に人の気配を感じた。友康が姉の部屋を訪ねる。父がまだ生きていた頃、姉が高校生だった頃から、二人は男と女の関係だった。このことでは、どちらも猫のように密やかだ。あの姉の性格である。隠している訳ではない。けれど、兄にさえ反発を抱かせない程、二人の

情事は遠くに感じる。

友康は玄関を使わない。どんなに急いでいても裏口へ廻る。友康と一緒に食事をしない。三人が食べ終えた後、土間の隅でそそくさと食事を済ませる。もう二十年以上もこの家で暮らしながら、彼は決して、三人の家族という顔をしていない。初めてこの家へ連れて来られた日のように、離れた所に立つてこちらを見つめている。

伽耶子はやつと眠りに落ちて行く自分を感じていた。兄にとつても、自分にとつても、姉が友康とともにあることは、安心を与えてくれる。

「昨日は、明彦が、ここにいてくれたの」

葉子の言葉の奥を察しようと、友康が振り向く。目が合う。

葉子は微かに肯いた。

友康は穏やかに微笑む。

「ありがとう」

葉子は手を伸ばして、友康の頬に触れた。

「このことをそんな風に喜んでくれるのは、きつとあなただけね」

友康の前では、緊張の糸が溶けてゆく。

葉子は、友康が初めてこの家に来た日を覚えている。小学校二年生の時だった。夜中、雨の中を帰宅した父が、濡れ鼠のような友康を連れていた。知恵遅れの子と言われて、誰もがそう

思っていた。ただ、葉子にはわかった。いつも俯いている目を覗き込みたかった。みんなが木偶の棒と馬鹿にしている彼が、誰一人気付かぬ微かな気配にも、振り返ることを知っていた。

「友康、私を見て……私にあなたの目を見せて」

葉子が囁く。

「その目が好きなの。あなたは決して誰のことも咎めない」

「あなたのことを咎める人などいやしな」

「ううん、人はみんな咎められる罪を持つてる。でも、そのことに気付きもしない幸せな人たちは、冷たい目で人を見るわ」

葉子の指は長い。ゆっくり友康の頬をなぞる。

「あなたの目の奥には、翳りの炎が瞬いている。チラチラ、チラチラ。それが私を慰めてくれた、耐える力をくれた」

「もう我慢することもない」

「そうかもしれないし、違うかもしれない。まだ、何もわからない」

葉子に促されるままに、友康は高価な陶器に触れるようにそつと葉子の体に手を伸ばした。ボタンをひとつづつ外していくと、胸の白い肌理の細かい肌、服の合わせ目から少しづつ見えてくる。友康は大事な儀式のように、ゆっくりと手を入れて乳房の温かみを感じていた。あまりにすべらかで柔らかい感触に、動きが止まる。その手に葉子の重みが掛かってくる。

微かに、尻込みするように、友康が身を引いた。

そのことを友康は説明出来ない。なにもかも彼女の為であつ

て欲しい。抱くことも、抱かないことも。

「利用した訳じゃないから」

葉子も言葉を見つげせない。いい訳にしかないし、友康にはいい訳も必要ない。

「いいんだ」

友康は部屋を出て行こうとした。

「お願い、それでもここにいて」

葉子は押し止めた。

葉子は布団の中で真っ直ぐに天井を見ていた。母の死んだ日を思い出していた。

見つけたのは、十歳の葉子だった。母の部屋の前にある大きな桜の古木の根方で、母は事切れていた。太い木の幹によりかかったまま頭を垂れた母の腕には、三歳の幼い明彦がしっかりと抱きしめられていた。

母に近づいて、その長い髪に降り注いだ桜の花びらを払ってあげた。たくさんのお花びらだった。もう長い時間が経ってしまったことはわかってきた。

葉子がなぜ、そんな朝早い時間に、庭へ出て母を見つけたのか、後に大人たちは虫の知らせと噂した。それが初めての予知だったのかもしれない。予知は知るだけ。知ったことを変える為に知らされる訳じゃない。

その時、ぐったりと抱きかかえられていた明彦が微かに目を

開けた。葉子と目が合った。すぐに、その臉は閉じられてしまったけれど、葉子は大声で人を呼んだ。

すでに死後硬直の始まってしまった腕から、明彦を取り出す為に、書生たちが三人がかりとなった。空恐ろしい光景だと、手伝いの年寄りたちは陰口を叩いていた。明彦は下働きの女にまかせられ、母の部屋に寝かされた。大人たちは死の儀式に大騒ぎだった。父はもともと子どもに興味のない人だ。妻の死を受け入れることが出来ないという表情で、宙を睨み続けている。いかに、もともと精神を病んでいたとはいえ、唐突な死だった。その為母の遺体は隣りの病院へと運ばれた。

母の部屋は、表の家屋から離れている。この朝の喧騒から、妙に取り残された。明彦が昏々と眠り続けていることに安心してか、付いていた女も忙しさに巻き込まれていった。そこに放置されている幼い子どものことをみなが忘れた。

やがて、目覚めた明彦はまた桜の木の下に戻った。根元にじつと座り続ける。もうずっと何も食べていない。なぜ母と引き離されてしまったのかも、わからなかった。だから、彼にとっではここにすることが必要だった。

葉子は、その時の自分の気持ちを思い返すことがある。十歳だった自分は何に耐えていたのか？ よくわからない。ただ、母と弟を失うことに耐えねばならないと思っていた。まだ、弟

が生きていたこと、生きているうちに自分が見つけてしまったことの罪に、心臓が早鐘のように鳴り続けていた。なのに、それでも、葉子は再び弟の様子を見に、戻った。母の部屋、布団の中にはいなかった。縁側から裸足のまま、庭へ下りた。桜の木が残した幼子のように、明彦は小さく丸まったまま土の上に横たわっていた。もう耐えられない。

(なにもかも引き受けますから) 葉子は拳を握り締めて、誓った。いや、言い訳をした。天に言い訳をした。自分のこの悪事を見逃して欲しいと。

大人になっても覚えてる。でも、あの感覚が何なのか、いまだに説明出来ない。その時の葉子は弟を自分の元に引き止めることは、罪悪なのだと思っていた。知っていながら、その小さな体を抱きしめ、屋敷の中へと連れ戻った。

その後、母は子どもを身籠っており、女兒が生まれたという話で屋敷は騒ぎとなった。死者から赤ん坊が生まれたという話は過去にも例があるらしいが、その不思議さを語り合わずにはいられない。大体誰一人、妊娠に気付いていなかったとは。当の本人さえも気付いていなかったのだろうか。だがむしろ、その不慮の死は、妊娠を理由に片付けることができた。

葉子は姉であるより、母だった。赤ん坊の世話は、乳母を雇い入れて済ませたが、人になつかない小さな弟は姉が学校から帰ると、その後ろをついて離れなかった。葉子と食事を取り、風呂に入り、眠った。けれどそれは、小学生の姉と小さな弟の

微笑ましい日常というには、かけ離れた空気があった。二人だけが感じている緊張の糸だった。やがて、明彦自身が小学生になり、友康や伽耶子が生活の中に加わってくると、明彦はこの世界を生きていくことに折り合いをつけたようだった。居場所を見つけたのかも知れない。

明彦が十歳を過ぎた頃、二人の関係はまた微妙に変わった。毎日お風呂に入れていた明彦の体が急に筋肉質に変わってきた時だった。女性のそれとは違う筋肉が肩や太腿を盛り上げ、表情が雛鳥ではなくなった。

怪我をして来た日、『学校で何かあった?』と問いかけた。弟は曖昧に笑う。葉子に話して解決しようとはしない。背を向けた。その背は男の厚さと大きさを持ち始めている。

葉子は息苦しさを覚えて、明彦から離れた。指を舐める癖は少年の無垢な表情をしながら、蛇の舌のようにチラチラと葉子を誘った。胸が苦しかった。弟になんの底意もないのに、自分の体がどんどん女になっていくことにどう抗してよいのかわからなかった。

そんな自分を救ってくれたのが、友康だ。そのせいで、友康が父にどんな目にあわされたか知ったのは随分後になってからだった。友康は初めから葉子が誰かに抱かれたがっていることを知っていた。それが、明彦であったことさえ、感づいていたのだろうか。だから、こんな風になにもかもを許してくれる。

（こんなことは起こり得なかつたはずだ）

今朝この部屋で隣りに眠る明彦を見ながら葉子は思った。未来を見た罪には、恐怖という罰が科せられた。けれど、明彦の胸に身を置いた一瞬は、未来永劫と引き換えてもかまわない。成就することなど、ただの一度も考えたことはなかつた。人に知られてはならない思いだつた。そして、伽耶子の能力に気付いた時、知られるどころか自分自身さえも騙し続けなければならぬことに思い至つた。高い塀を心のまわりに巡らして生きてきた。

自分の死の向こうの時間を見る。これが弟との一夜の代償であるなら、このことがなければ決して乗り越えられなかつた一夜であつたなら、肯定するしかない。すべては、自分に始まり、自分に終わる。けれど、明彦はどうなるのだろうか。

「今度は俺が守るから、命に代えても守るから、怖がらないで」明彦の言葉が蘇える。ずっと守ってきた弟。今、姉の死の運命を打ち破ろうとあがいている。救えるとあらば、何のためらいもなく、奈落の底にダイブしてしまうのだろうか。

サクヤ

東京の一等地からは、少し外れて自社ビルを建てたのは、もちろん取引先との関係や土地購入の問題、社員の通勤の便など

の諸要素もあつたけれど、その眺望が笹原の心を惹いていた。周りに高層ビルがないので、最上階の部屋からの眺めは、どこか下界を見下ろすようだつた。昔見た二流映画の主人公が、三六〇度を見渡せる最上階の部屋に住んでいた。日の昇る窓辺で彼女が手を広げると、世界中が彼女にひざまづくような気がした。もちろん、そんなことは一言も葉子には話していない。大体ここに彼女の部屋を作るといっただけで、葉子は大反対。（そんなもの無駄よ）の一言で蹴散らされてしまった。それでも、役員室にするだのなんだのと誤魔化して、この部屋を作つたのは、笹原の葉子を賛美する心の熱さだつた。

たとえ本人に気に入られなくとも、笹原は葉子が人と会う時には、必ずこの部屋をセッティングした。俗世の中で頂点に立っている男たちが、ここで葉子に對峙する時、何を感じるか：
：笹原はそれを演出していた。葉子の強い意志やカリスマ性、そして、何よりその未来を見る目をより効果的に演出したかつた。

もしかしたら、今葉子自身もそれを利用していいのかも知らない。この一週間、彼女は強引に事を進めている。笹原が現実には抗しきれない自分に焦りを感じているのを横目に、選択を迫られている事業をある方向へと振り向けている。

これだけ成長してしまつた企業という集団は、社会的な立場・業界での地位・様々な思惑の中でそうそう左右に舵をとれるものではない。しかし、葉子の場合は、許されていた。あち

ここに彼女の信奉者がいるせいもあるし、笹原が彼女を表へ出さないのかえって動きやすい。すべてが笹原の名義になっている。未来の見える葉子に、笹原にもし何かあった時というのを心配する必要はなく、笹原の心変わりなど気にする気にもならなかった。なのに、今自分が消えた後のことを考えねばならぬ。

笹原にも、その葉子の気持ちは見えていた。あの弟妹の特殊性は、笹原自身にはよくわからなかった。一緒に住んでいるタズさんはもちろん、友康にだってわかりきれてはいない。もしかしたら、葉子自身にも。ただ、葉子が信じ込んでいるのは、二人が彼女の庇護なしには、生きていけないということだ。葉子が、経済活動によって財産を維持しようとしているのは、二人にとってあの棲家を必要だと感じているせいなのだ。

伽耶子の心がかもつと大人になって、あの森を出て行ける日があるかもしれない。明彦が普通の伴侶を得て、世間の中へ踏み込んでいける日がくるかもしれない。でも、それが一年以内に訪れるとは、とても思えない。だからこそその、ここ数日の葉子の強引な駆け引きなのだ、笹原は感じていた。

葉子が優雅に会釈を返して、客を送り出した。エレベーターホールに向かう扉の前で物思いに耽っていた笹原は立ち上がった。

「では、また」

客人の別れ際の挨拶に、葉子が微笑む。

「残念ながら、また、はありませんわ。お互いもう会う必要がないほど順調に事は進んで行きます」

その恰幅の良い客は、もう一度軽く頭を下げて、扉を出て行った。振り返って笹原と目が合うと、葉子が悪戯っぽく微笑む。

「更正法を受けようっていうこの際に来て、どうしようっていうんだよ」

「大丈夫」

「また、それか。この所ずっとあんな客ばかり相手にしてる」

「大丈夫」

葉子は繰り返すとソファに腰掛けた。

「あそこの新素材開発部門を統合したいのよ」

「業界三位と四位をくっつけて一位にしようってかい」

「いい感ね」

「君はそれでどうしたいんだ」

「一年は短いもの。荒唐治も必要よ」

笹原は何気ない風を装って、顔を背けた。一年という言葉に心がビクついた。

沈黙の中、ソックの後に、女子社員が入って来た。客の飲み物を片付けていく。片付けながら、チラリと視線を、この広いガラス張りの空間の隅へと走らせる。

西側の窓辺、夕日にシルエットをつくった明彦がいる。視線は、彼を盗み見るだけで通り過ぎ、女子社員はお盆を手に出

行った。

あの日から、一週間。こうして、常に明彦がいるという状態には慣れてきた。もともと無口な人間だし、彼自身が自分の気配を消してしまうような所がある。そして、こうやって人の視線で気付くのだ。笹原がいくら慣れても、周りの人間にとつて、明彦は目を引く存在だし、若い女性にとつては、ましてである。

葉子に、彼女の後ろをずっとついて歩く、それこそトイレまでもついて行きそうなその若者が誰なのかを尋ねる人間はいなかった。彼女が説明しないのに、口出しするのもどうかと、笹原も曖昧な返事しかしていない。考えてみれば、こんなことになるまで、一度も明彦はこのビルを訪れたことがなかった。大学を卒業する時、笹原は明彦を入社させることを勧めた。明彦も考えないではなかったようなのだが、結局話はそのまま流れてしまった。

「(一体何者なのか?) まあ、話題にならないはずがないよな」
笹原は、思わずつぶやいていた。

葉子はテーブルに書類を広げてながめていたが、
「ねえ、明彦」
弟を呼んだ。

「一度は自分の会社に顔を出しなさい。あなたが今、やってることは、とても馬鹿げたことよ」

明彦は葉子の方へ顔を向けたが、近付いて来ようとはしなかった。

「大の大人が、会社を辞めるのに、電話一本なんて、非常識もいいところよ」

何度か繰り返してきた議論が蒸し返される。

「もし、会社に行つてる間に何かあったら」

「何も無いわよ」

「何が起るんだ。だから、あんな」

それ以上の言葉は見つからない。予見のことに、触れる勇氣はない。

「だったら、訓練を受けた人間を雇うわ。大体、人間何が起るかわかんないもんなのよ。ほら、今朝のニュースみたいに高速道路から車が落ちてきたら、あなたがついてたつて、しようがないでしょ」

「助ける、絶対に助けるから」

「あのね、それはあなたが五歳や六歳の時にでも言ってくれたんだったらうれしいけど、もう大人なんだから」

明彦は悔しように、唇を噛んで言葉を搜す。言い争いになったら、この弟が姉に勝てるはずもない。笹原は気の毒な目で、明彦の様子を見ていた。

胎 児

伽耶子はただおろおろしているだけの自分が齒痒かった。姉

はいつものようである。あの日一度だけ崩された、姉の心に張り巡らされた高い堀。それも翌日には、何事もなかったように修復されていた。

兄の心は見えない様にして、素通しのガラスケースで、姉とのことはわかつていた。それで特別に自分の何かの感情が押し寄せることもなかった。むしろ、あのガードのはずれた一瞬に姉の心を襲っていた恐怖を思うと身がすくんだ。姉がああ恐怖を抱えながら、日常を過ごしていると思うと、その方が痛かった。何をしたらいいのかわからないことが、心を疲れさせた。

そして、兄。すでに、この二ヶ月でどれほど憔悴しているのか。世間的に言えば、兄と友康と笹原は姉を挟んだライバル関係にあるのだろうが、兄にとつて友康は唯一姉を託せる人物で、姉が友康と居る時は、つかの間の休息になっている。あんなに嫌っていた笹原にさえ、頼る気持ちが生まれてきている。三人は、かぐや姫を守る男たちのようだ。月を見上げながら何が大事な姫君を奪いにくるのか、身構えている。

自分は、どうしたらいいのだろう。この力が何か姉を守るために使えないだろうか。押し寄せる人の思考に怯えるのではなく、その中から、姉に害するものを排除するために使えないだろうか。

その為には、自分が強くならなくてはならないことを学んだ。兄の初めての恋は不可思議な夢物語のようだった。兄を守る為には、その相手、京子のことを知らねばならなかった。初めて、

自らの意志で人の心を読んだ。結果が良かったのかどうかはわからないが、少なくとも兄に危害が加えられることを、避けることはできた。

夜、葉子が帰ってきた。送り届けた笹原が車へ戻って行く。明彦は後を追って二、三步踏み出した。笹原に声を掛けようとしている。が、言葉は呑み込まれてしまった。明彦の内気さはいつもタイミングを外した気まずさを生む。

その一瞬で伽耶子はその間に開ける今日の出来事を見てとれる。笹原が葉子に、病院で精密検査を受けさせたのだ。

人の死には、どういう可能性があるのだろうか。老衰、事故死、自殺、他殺、病死。バリエーションは少ない。老衰と自殺は排除していいだろう。事故死、他殺ばかりに目が向いていたが、病気の可能性だつてあるだろう。このふた月、笹原は病院に行くように葉子に言い続けてうるさがられていた。が、めげない彼のしつこさが勝つたのだ。明彦はそのことを、感謝したかった。なにに別れ際までその言葉を持ち越し、別れ際にさえ声に発することが出来なかった。

明彦は、葉子に付いて回るようになって、笹原を理解し始めていた。なぜ、葉子が彼を信頼するのか。腰巾着を気取った軽さの陰に何かもつと、葉子にしがみつくような切実さが見え隠れする。それは、明彦や友康も持っているものだった。いや、彼女を教祖様と呼ぶ人々も、そんな片鱗を持っている。だから、

みんな、葉子を守りたい。

友康が葉子の部屋に入っていく。障子が閉まって、明彦の心のどこかがほっとする。葉子にへばりついて、スピッツのように、一日まわりに警戒心剥き出しの牙を見せていた自分を脱いで、ぼーっ立っていることが許される気がする。振り向くと伽耶子が後ろにいた。

（昼間は笹原が、夜は友康が守っている。自分はただ行ったり来たりしているだけで……一体何をしてるんだろう）

相変わらず、明彦は伽耶子に話し掛けるとき、音を忘れる。他の人と違って、明彦は触れなくても、意思をそこに向けなくても、姿を見るだけで、必要とあれば離れていても、心を読むことが出来た。

（姉さんが不安そうな様子を見せたのは、あの日だけだった。自分の手が届いたのは、あの日だけだった。姉さんはやっぱり、ただ見つめるだけの遠い存在に戻ってる。でも、もう騙されない。あの日の姉さんも本当の姉さんなんだ。姉さんにこんな生き方をさせているのは、俺自身のせいなんだ）

明彦の繰り返すの向こうには、葉子を抱いたあの日の感触がある。伽耶子は、それを知ってしまう自分が明彦の性ではなく、葉子の性であることが不思議だった。

明彦はフラフラとした足取りのまま、庭へ降りて森へと向かって行く。その切り株に座ると、ただじっと姉の部屋を見つ

めている。別に再び葉子を抱きたいと思っているのでも、もはや笹原や友康よりも葉子に近づきたいというのでさえもない。疲弊した明彦の心は、誕生日が過ぎてても姉がいてくれることだけを望んでいる。ただ、その為には何かをするのではなく、ひたすら時の過ぎるのを待つしかない、あの予見が外れるのを待つしかないということが、明彦を追い詰めて行く。

伽耶子はそんな兄の横に立って、森の木々を見上げた。生まれてからずっと、こうして見上げ続けてきた。この兄とともに、肩を寄せ合って。

明彦の隣りに座ろうとすると、兄はふっと立ち上がった。何気ない風を装ったぎこちなさをお互い感じてしまう。あの時以来、明彦は決して伽耶子に触れようとしなない。本当の京子の死んだ朝、池のほとりで、変容した兄の心に怯えた。それでも、この森を出て行こうとした兄をこの手で引き止めた。そこまで。二人の関係はそこで立ち止まった。

「でも、本当に姉さんが一番側に居て欲しいのは、兄さんなんだから」

慰めの言葉を口にしながら、伽耶子の手が、軽く明彦の腕に触れた。押し寄せるブルーの洪水。目眩を起こしそうな、光。

伽耶子はその狼狽を知られないように、手を離れた。それ以上は無理だった。もし、明彦に触れることによつて、自分が倒れたり、パニックを起こしたりしたら、一番傷つくのは明彦だということはいくわかっていた。

明彦は遠くを見つめたまま、傍らに立っている。

昔から明彦の心にはただ一箇所、伽耶子にも見えない場所があった。今、青い光を背景にすると、そこだけ余計にブラックホールのように暗い。いつからそこにあつたのか？ 小さい頃には、パンドラの箱を連想した。一度だけその箱に触れようとしてひどい目にあつたことがある。こうして木にもたれて眠っている兄の頬に触れ、その心に入つていった。ずっと気になつていた。パンドラの箱を開けようと、その蓋に触れた。

手ひどい悪夢に襲われた。薄暗い廊下を歩いていく。家の中のどこかなのはわかつていたが、夢の不思議さで、それはどこでもなかつた。部屋のドアが半分開いていた。伽耶子は自分の目ざすものがこの中にあることを知つていった。誰かがこちらに背を向けていた。大きな背中だつた。そこは書斎なのだが、何か理科の実験室を想像させる。壁一面に飾られている大小様々な蝶の標本箱のせいだ。

窓際に木製のがっしりとした机がある。その上には標本台に張られるような真っ白な布。そして蝶ではない、人間の標本。すでに生きているもののそれではない、静止した肉体、白蟻化した肌。伽耶子は位置を変えてその標本を見ようとした。大きな背中の男が標本の腹に手をかざして触れようと膝をついた。死者の横顔が見える。それは、兄だつた。

幼かつた伽耶子は、その日高熱を発し、何度もその悪夢を見

せられることとなつた。それから二度とそのパンドラの箱に手を触れたことはない。兄の心の隅に置かれていことにさえ気が付かぬ振りをしていた。それなのに、兄の変容、心に張られた青い背景は、伽耶子にパンドラの箱の存在を押しつけてくる。

明彦の視線が動いた。葉子の部屋を出て、友康がこちらへ向かつてくる。葉子が伽耶子を呼んでいることを伝えた。伽耶子が姉の部屋へと向かうのを見送りながら、友康は置いたままにしておいた手斧を取つた。昼間、友康は一ヶ月ほど前の落雷で死んでしまった木の幹で、臼を作り始めた。

「どこに行つてた？」

明彦がその手元を見つめながら尋ねる。飄々と旅に出る友康が帰るたびに明彦はその話を聞きたがつた。この森ではない世界の話。

「東北から下つてきて、群馬にしばらく」

早朝の電話に呼び出されてあわてて帰つて来た。考えてみればあれから二ヶ月、こんな風に明彦と話す時間も持つてない。

余裕がなかつた。

「なんの木があつた？」

「桜だ；でも」

枯れかけた木や花の咲かなくなった木の再生を頼まれて、全国のあるところらに出かけて行く。口込みで時折舞い込んでくる依頼がある。

「今年が最期かな。もう咲きたくないっていうんだからしょうがない」

友康の言葉の中では、木は自分の気持ちを自在に話す生き物だ。

「それは、もう年をとってしまったから？」

「まあ、年寄りには年寄りだが……」

「どうして咲きたくないんだらう？」

「そこまでは知らん」

つつけんどんに会話は終わる。でも、今年だけは咲くのだ。

それは、きっと友康が行って世話をしたからだ。明彦は友康がどんなに心をこめて、丹念に丹念に木に接するかを知っている。木の悲鳴が友康の心にだけは届く。

「どうした？」

「えっ？」

前置きなしの唐突な問いに明彦は戸惑った。

「いや、何か話したいことがあるのかと」

話したいことはあった。なにもかも。しかし、人と人は言葉をかきなければ伝えられない。妹のように、一瞬にすべてを見られることなど、有り得ない。京子のことも、伽耶子と自分の関係が変化してしまったことも、姉への思いも、友康に伝えなかった。けれど、明彦はその努力を怠ってしまった。ただ、そこに座り込んだままじっと友康の作業を見つめている。その向こうに姉の部屋の障子が見える。

部屋に入った伽耶子は、葉子の高揚した気持ちを感じた。

「伽耶子、今日海老沢病院へ行って来たの」

兄の記憶から精密検査に行ったことは知っている。伽耶子はこくと肯いた。

「妊娠二カ月って言われた」

伽耶子は、言葉の意味を考える。

「赤ちゃんが生まれるの？」

「そうよ」

葉子は無邪気に微笑む。聞いていいのかわからなかったけれど、聞かずにはいられない。

「兄さんの子？」

「そう」

大きく深呼吸をするような返事だった。

伽耶子が、葉子の思いを知ったのは、あの恐怖が心の壁を打ち砕いた時である。伽耶子という異能の者と暮らしながら葉子は明彦への思いを隠し続けた。彼女の心に打ち立てられた高い塀は、それを隠す為のものであることを知った。自分とは、全く異質の念が明彦に向けられている。自分が明彦に求めるもの。姉が求めるもの。源が違い過ぎる。

笹原は病院に戻った。慣れた足取りで、深夜の廊下を研究室へ向かう。

海老沢病院は森に隣接する総合病院で、昔からの白居家の主治医であった。その上、二十年程前、倒産寸前のところを、葉子たちの父、白居嘉一郎が再建したという経緯がある。

さほどの規模を持つわけでもないこの病院の設備が充実しているのは、サクヤグループのお陰だった。

笹原を待っていたのは海老沢悠一。この病院の息子で次期医院長でもある。

「大丈夫だ。間違いなく健康体だよ。……ただ、妊娠してる」「そうか」

笹原は表情を見せない。このポーカーフェイスの方が実は本当のこいつに近いと海老沢は思っている。人当たりの良い笹原は偽者だ。変わり者と呼ばれている自分より、ずっとディープな意味での変わり者だ。海老沢が笹原をよく知っているのは、彼がこの病院に預けられていた時期があるからだだった。同じ年のこともあって、笹原を微妙な存在に感じている。同じ年

「近親相姦だろう。どうすんだ」

わざと痛い所を突いた。いじめたいわけではないが、こと白居葉子に関しての笹原の盲信ぶりには、イライラさせられている。白居家のことはすべて把握しているつもりだ。自分の父親もこの笹原のようにあの家にへいこら仕えていた。医者守秘義務というよりまさに共犯者だった。

友康のことも知っている。別にたいしてしゃべったことがあるわけではないが、近所ではあるし、医者になってからは、白

居家へ出向くこともあるので姿を見かけることもあった。彼が海老沢の患者であったことはあの一度きりだ。高校生だった葉子と関係を持った時、白居嘉一郎は、友康を追い出すのではなく、この病院でパイパットさせた。まだ、二十代の子にである。このことが海老沢の葉子に対する印象そのものになっている。その後、葉子にとっては従兄弟でもある笹原とも関係を持ち、今また弟に手を出したというのは、稀代の悪女といってもいいだろう。

「どんな子が生まれるんだろう」

「さあ、生まれるかどうかもわからんさ」

「とにかく無事出産できるように全力を尽くしてくれ」

「おまえ、馬鹿か！」

海老沢の罵声に、ふっと意外そうな顔をする。こういう素直な顔に勝てない。

「馬鹿かもしれない。でも、葉子さんの望みは何でも叶えたいんだ」

「おまえなあ、この前呑んだ時、おれに何を愚痴ったか覚えてるか？」

笹原は肯いた。誕生日の翌日、葉子の電話がまず、笹原ではなく友康の元へかかったことを話した。仕事でさえあれば、狡賢く、あるいは極めて誠実に、どんな大取引も成功させる男が、そんなつまらないことをこだわっていた。飲んで思わず愚痴になるほどに。

「おまえ、第三の男なんだぞ。いいかげん目を覚ませよ！ あの女にさえ、振り回されてなきや、いい男だよ。富も権力も、いい女房もいるじゃないか」

「帰る」

笹原はカバンを手にサッサと部屋を出ようとしていた。

「怒るなよ」

海老沢は部屋の電気を消して、慌ててあとを追った。

母の戸籍

事の起こりは、一昨日の朝かかって来た電話だった。編集長が持ち込んで来たのは、福島県の寒村を取材する仕事だった。何でも原稿を依頼したフリーのライターが芸能人の内幕話を出版して訴えられ、雲隠れしてしまったという。そんな事情を聞いているうちは、たいして仕事に興味もわかなかつたのだが、地図を眺めて、それが白居葉子の母親の出身地の近くだということに気付いた。休場は、手の平を返したように乗り気になっていた。

なぜこんなに白居葉子のことが気にかかるのか。

父の死。失職。休場の生活は一変した。父を一族の出世頭と呼び、自慢していた親戚はいっせいに背を向けた。珍しい苗字が災いして『身内の人間か？』と職場で尋ねられ冷汗をかいた、

と従兄弟が話していた。父が仕事で何度も便宜を図ってやった甥である。悔しかった。

父は中途半端な人間だったのかもしれない。罪の意識も理想と現実のギャップもそこに存在するのではなく、個々の人間がそれぞれに作り上げるものだ。ついにやましさを拭い切れなかった人間は、罪とさえ感じぬ人間に太刀打ちできるはずがない。父の死は無駄な死だ。

余計に、悔しかった。

そんな時、白居葉子に会った。八つ当たりだったと思う。が、その悔しさを誰かにぶつけたかった。そして、休場は初めて父の死を本当の意味で哀れむ目を見た。

まもなく心労がたたったのか、母が急逝した。再び葬儀を出し、財産を整理し、都心のマンションに落ち着くとすべてを失ってしまった自分に気付いた。脱力感の中、もう、悔しいと思う心も残らなかつた。

ブラブラしている休場を拾ったのは、学生時代の先輩で経済誌の編集をしている人物だった。そして、財界人のインタビュー記事を任せられ、取材に出かけるうちに「サクヤグループ」や「白居葉子」の存在に出会うことになった。

話の中でふとその存在に掠る。休場が突っ込んだ質問をする、相手は口を噤む。まるで彼女を守る忠実な下僕であるかのように。今、どんどん厭世的になっていく自分を辛うじて実社会に繋ぎ止めているのが、白居葉子に対する純粋な好奇心のよ

うな気がする。

葉子のあの予知能力はどこから生まれたのか……。

両親はどんな人物なのかを考えた。父親は東京の人間であり、経済界に知人も多かった為、少しずつ輪郭が浮かび上がってきた。が、母親についてはゼロである。そこでちょうど、母親の出身地を訪ねてみようかと考えていた所だった。

(渡りに舟という奴だな)

福島での取材を終えてから、足を伸ばして白居葉子の母、旧姓仲野幸枝の出生地を訪れた。

村は小さく、お定まりのように年寄りが多かった。住民票によれば、幸枝は十六歳で白居家に入籍。そこで、住所を移している。すぐに葉子を産み、十年後、伽耶子を産んで、亡くなっている。こんな田舎の小娘が東京の御曹司とどこで知り合って、そんな年で結婚することになったのだろう。

「何処から当たるか」

ひとわたり家の表札を眺めながら、ぶらぶら村を歩いてみた。相馬・芹沢という苗字が大半を占め、仲野という家は二件だけだった。廻りで話を聞いてみたが、他所者への素っ気無さもあって、なかなかいい情報は得られない。

これから葬儀があるのか、喪服姿の人間が参参五五歩いて行く。休場は、五十歳ぐらいの女性が道端で自転車のチェーンを直しているのに行き会った。

「すみません、ちょっとお尋ねしたいんですが……」

「なんですかあ」

女性は手を止めてこちらを振り返った。

「三十年ほど前になると思うんですが、仲野幸枝さんという方がここらへんに住んでいて、東京にお嫁に行ったと思うんですけど、ご存知ありませんか？ 当時十六歳だったんで、もしかしたら、同じくらいかと思つて」

「三十年前で十六歳じゃ、うちの一番上の姉ちゃんの年だけんど、そんな子いねけど」

休場はどうやら女性の年を十ほど読み違えていたことに気付いたが、そんなことはおくびにも出さなかった。根気良く相手が記憶の糸をたどるのを待った。が、それより先に、運良くその一番上の姉と思しき人物が通りかかった。

「和江、あんたみんな待たして何してるだべ。あたしやさき行くげよ」

声をかけた喪服姿の女性は、警戒心の見える目で休場を見た。

二人のやりとりは、早口の方言で良く聞き取れなかったが、和江と呼ばれた妹の方は、人なつっこ親切だった。姉が行つてしまつても、残つて休場の質問に答えてくれた。

「間違いないここらにや、姉ちゃんの年やそこらで東京に嫁に行ったもんはいねえだば。だども、仲野さんに幸枝ちゃんて子はいたらしがったけど、まあ、なんかちよこつと複雑なものだから、いろいろあつて十六で死んだべ」

「死んだ？」

「あんた、なに調べてなさんべ？」

「いや、ちよつと、生き別れのお母さんを探してるお客さんがいて……」

「へえ、探偵さんとかがね、でもそりや無駄足でねえんだろか。」

「死んだもんに子どもは産めんだけ」

「そうですね」

チェーンは直った。別れ際、

「納得いかながったら、お寺さんで過去帖でもみせてもらおうげよ」

女性は行きかけたが、

「だべ、今日は無理がな。お寺さんのお婆ちゃんも亡くなったもんだがらあ」

休場は軽く会釈した。顔を上げると、何人かの喪服が横を通り過ぎて行った。

休場は、それでも寺を訪ねてみようと思った。途中で墓場があった。国道沿いのその墓地は、道路に寸断された為、雑然とした並びになっている。仲野幸枝の墓は墓石ではなく、木の墓標だった。側面に記された数人の名の中に仲野幸枝という名と戒名・死亡年月日、享年十六歳という文字が見えた。

そこから寺までもまた少し距離があった。葬儀の関係者が行き来する正面ではなく、裏木戸から入った。母屋から離れた隠居所のようなたたずまいで、裏庭に面した縁側があった。その前で誰かが焚き火をしている。山の草木に覆われた庭で、朽ち

かけた古木のような老人が火に何かをくべている。やがて、ゆつくりと立ち上がると縁側の方から大きな物をずると引き摺って来た。布の切れ端が目に入る。洋服？ 人？ その足とおぼしき二本を両手で持って、火の脇を通り、頭の方から火に突っ込もうとしている。

「何をするんですか！」

休場は老人の手を掴んでいた。老人は驚いた風も見せず、休場を見返す。休場はすぐにその人型のものが人間ほどもある大きさの人形であることに気付いた。

「すみません」

慌てて手を離れた。

「人に見えて」

赤面した。いくら葬儀の晩とはいえ……。

「いくらばああの通夜とはいえ、こげな所で燃やしやあせんだらうなあ」

ひよっひよっひよっというような音で老人は笑った。

「すみません」

休場はもう一度謝った。

「こげな大きなもんじゃで、お棺に入れてやる訳にもいかねえべ、ここで燃やしてやろうと思うただけ」

老人のくべているのは、お下げ髪の、布に目・鼻を書いたような人形だった。ただ、その顔立ちが特徴的だったので、きつと誰かに似せて作られたものではないか、と想像出来た。

しかし、それもあつという間に燃えていく。

「何処の方だば。こげな晩にお見えじゃとあ」

どうやら、連れ合いを亡くされた当の本人らしいとわかつて、質問しにくくなつたが、こういうことはやっぱり年長者の方がよく知っているものであろう。

「仲野幸枝さんという方の消息を尋ねてきたのですが？」

突然の闖入者にも驚かなかつた老人が血相を変えた。

「二十、いや三十年ぶり、いやもつとになるだか。他所様からその名を聞くのはなあ、こげな日に……しかも、訪ねてくる人がおるとは、いったいどうしたことだば」

老人はまじまじと休場を眺め、燃える人形に視線を移した。

「全く、ばあさん、あなたのお導きだか」

「知つてらっしゃるんですか？」

「今、燃えているその人形の子だば」

しばらく、人形の燃え尽きるのを眺めていたが、

「まあ、世の中には不思議なことはいくらでも、あるもんだで」

老人は縁側に腰掛けた。

「こんな偶然もあるもんかもしれんなあ」

老人は居住まいを正すと、休場に気を使つてか、あまり方言の入らない、説法のような話ぶりで淡々と語つた。

休場は急かすでもなく、相槌を打つでもなく、老人の話に耳を傾けた。それは、一人の少女の悲しい物語だつた。それを引

きずり続けた老婆の話でもあつた。

「拙僧の所は二人の息子も大きくなつて、家を離れて大学に行つとつたで、幸枝が両親を亡くした後、親戚が引き取るまでしばらくの間この寺で預かつただが、婆さんは随分可愛がつておつた。親戚に引き取られても、貧しい時代だつたで、年中婆さんを慕つて逃げて来た。そうなる可不憫でないんじやろ。器量も十人並の、まあ、別に取り立てて取り柄のある娘でねがつたが……」

老人はそこに娘の姿を思い描くように目を細めた。

「うちの婆さんは、この寺の一人娘で、わしや入り婿つてやつじやで。あんな婆さんにも若い頃があつたわけで、女学校に行きたがつたげよ。寺の跡をとるがや、生まれた時から決まつておつて、余計外に出て行きたい気持ちが強がつたんじやろう」

葬儀の喧騒が遠い。

「幸枝が中学校を出て、仙台へ奉公に行くことになつて、奉公先で夜学に通わせてくれるつて話、一番喜んでたのあ、ばあさんじやつた。遠くに行かせるのあ心配だし、さみしいが幸枝のためにはこれが一番ええと信じとつた。親もいない子じや、こんな田舎を出て、ちゃんと自分一人の力で食えるようになるというんが、幸せになる道じやと信じておつたんじや。」

それきり、うまくいつとると思つとつたが、また、帰つて来てしまつた。雪の晩じやつた。結局婆さんはうちにあげることもしないで、駅まで送つて行つて、電車に乗るのを見送つてきだ

げよ。法事から、帰ってきたわしにやあ、やつぱり帰ってくるたびに不憫に思つて甘やかしたのがいかんがったんじやろか、と話すんじやが、そう言つとる口で、だども今度帰つてきだら、もう奉公先に戻さんで、うちの子としてここから嫁に出すべかのお、なんぞいうんじや。わしや、幸枝のこととなるんどどこまでも甘いことじやとあきれたげよ。

十五夜の月が雪野つ原の上に皓皓と照つておつた。静かにしんしんと冷え込む晩じやつた。翌朝、そこんとこの畑のおやじが、木の下にうづくまつて死んだる幸枝を見つけたが。いったいどこらへんから引き返してきたんやら。どれほど奉公先にいやなことがあつたんやら。戻つてきてはみたものの、もうこの寺の門もくぐれねえで、じつと一晩あそこに座つて門を見とつたのかもしれんげよ。

婆さんは何も言わんがつた。わしもそれだけ辛いんじやろうと触れんでおつた……

老人は遠くを見ていた。時の向こうを見ているようだった。

「ところがじやよ」

老人の目が突然休場に向けられた。

「年をとるつちやあこういうことだべ。婆さんぼけてきよつたがじや」

まるで、そのことを楽しんでいたかのように、老人は柔和な目を向けてくる。

「そしたら、話すこたあ話すこたあ幸枝のことばかりでねえが。

おなごはみんな幸枝に見えるようじやつた。洋裁の先生をしとる孫が、婆さんの話をよう聞いてわざわざこげな人形まで作つてくれただ。寝込んでからも、こん人形に昔話聞がせたり、あん子の好きな蓬餅を食べさせようとしたり……最後の何年かあ、幸枝といっしよに暮らせたんじやと思つとるげよ」

「それで、いっしよに焼いてあげよう……」

老人はそれには答えず、庭に下りた。くすぶる人形を枝でつづいている。

「考えてみりやあ、ぼけるまで、一度も口に出せんほど、後悔しとつたんだらうな」

帰りの列車。外を景色が流れていく。死んだ老婆とあの人形の子の駅に向かう道筋を、休場は思い浮かべた。重い気持ちを抱えた少女は、何を話し、老婆は何を答えたのだらう。それは、自分の中でもずつと引つかかっていた、父と自分の姿でもあった。取り立てていい息子でもなかつたし、いい父親でもなかつたと思う。普通の親子だった。反抗期もあつたけれど、働き始めて父親を理解出来る様にもなつてきた。自分が結婚して、親は引退して、普通に世代交代して見送つたなら、いろんなことを懐かしめただらう。時のベクトルは死者の上にも止まらぬ。

(何を話したのが最後だったらう)

そこに止まってしまうのは、後悔という石があまりにも重すぎるからだ。

(晩飯はどこで食べたんだ?)

同じ家に住みながら、お互いの忙しさに一週間や二週間、顔も合わせないような時もあった。でも、あの自殺する前日、父は居間に一人座っていて、夜中帰って来た休場にそう聞いたのだ。忙しさにかまけてコンビニのおにぎりしか食べていなかったと答えると、庁舎脇の店の名をあげて、あそこの定食は飽きがこなくていい、と言った。一分もかからない会話だった。

あの一分の会話の為に父はずっとあそこに座っていたのかもしれない。自分もつと違う返事をしたなら、自分がさつさと部屋に入ってしまったわけならば、会話は続いたのかもしれない。何か父の心を翻させるものが自分にはなかったのだろうか。

思いは再び、その堂堂巡りに戻っていかうとする。(今は考えるまい!) 休場は首を横に振った。今は別に考えるべきことがある。

老人の話にうそがあるとも思えなかった。では、何者が死んだ少女の籍を東京へ移したのか、死亡届も出さずに。三十年前埋葬許可はどのようにになっていたのだろうか。偽造したのだろうか。田舎のルーズさで適当に済ませられたのか。細かいことは、想像の域を出ないが、白居家に嫁いだのが、仲野幸枝でないことは確かだ。

車内放送で、間もなく東京へ着く事が告げられた。

(どこから調べるか)

休場は、まるで誘蛾灯に引き付けられる蛾のように、白居葉

子に吸い寄せられていく自分を感じていた。

白 薔 薇

昔、一緒に白居家で働いた富子とは、年賀状のやり取りもあつたし、彼女の娘夫婦が東京へ転勤になって、上京の折に会つたりもしていた。

タズと富子の付き合いは長かった。タズが奉公に上がった時、富子はすでに白居家で乳母をしていた。タズとは、十違い。近所の大工と所帯を持ったのだが、事故で夫を亡くしていた。やがて親が老いと面倒をみる為、田舎に引っ込んでしまった。

「そう、タズちゃんももう六十超えたんだ」

二人は白居家の近所の甘味店で会っていた。

「世間で言うなら、定年なんでしょうけど、何処にも行くところもないし」

「うちの田舎に来ない? ちょっと寒いけど、まあ、のんびりした所よ」

「本当に頼むことになるかもしれないわ。動けなくなつて迷惑かける前に、どうにかしたいとは思つてるの。老人ホームにも入ればいいんだろうけど、なかなかかふんぎりがつかなくてね」

「葉子さんはどう言つてるの?」

幼い頃はお嬢様と呼んでいた。葉子が、自分の代になると、

自分に関わるすべての人間に、葉子さんと呼ぶように指示した。陰では教祖様、森の跡取りなど、どうしても葉子さんと呼ぶことに抵抗のある人々がいろいろな呼称を使うようだが、毎日彼女と向かい合って生活している人間たちは素直にそれに従った。

富子の問いに、タズは、言い淀んだが……。

「去年退職金と家を用意するから、通いにはどうかって言われたの。それは、もうびつくりするようなお金だね。私の老後を心配してくれてるのはわかるんだけど、水臭い気がして断っちゃったのよ」

「もったいない」

「そしたら、この前、居られる限りこの家に居て欲しいって頼まれて……うれしかった」

「なんで、どうかしたの？」

「葉子さんに赤ちゃんが生まれるの」

富子は呆気にとられた顔をした。

「結婚はしてないわよね。誰の子よ、友康？ 笹原さん？」

「そんなことはどうでもいいのよ。葉子さんの子なんだから」

「まあね、あの人のやることは、私たち凡人にはわからないもの」

富子は窓の外の風景を見ていた。もちろん彼女は、葉子のことを生まれた時から知っている。葉子の父の乳母だったのだから。そして常日頃、白居家もあの親子も自分たちとは全く違う世界の人間だと言っていた。それは、お金や身分といったもの

ではない。人間の中身が違う。あの人たちを見ると、自分たちはまともな世界に生きているとつくづく思う、と言うのだ。「あの人たちにはあんまり関わらないほうがいいと思うわ。長い間勤めさせてもらって、今更こんなこというのもなんだけど、離れてみてつくづくわかるのよ。あの森の家はおかしいわ」

富子はわざと、世間の言う森の家という呼称を使った。

「葉子さんだけじゃない。明彦さんも伽耶子さんもなんか変わったもの。その上、若奥様の亡くなった時も、旦那様の亡くなった時も騒ぎだったじゃない。あなたはこのうちしか知らないから、こんなもんかと思うのかもしれないけど、世間はもつと普通よ。田舎にはなんにも起きないわ」

タズは弱弱しく微笑んだ。富子はいいい人間だが、こういう所は苦手だった。タズはずっと白居家にいたいのだ、ただ、老いて迷惑をかけることを心配しているに過ぎない。

富子が、久しぶりに森の家の回りを歩いて帰る、というので二人は店を出てぶらぶらと歩き出した。富子はタズさえ知らない白居家の昔話をよく知っていた。

富子は、福島から叔父に連れて来られて、奉公に上がった。富子を連れてきた叔父もまた、親戚の者に連れて来られ、そうして代々使用人として白居家に住み、いろいろな話を耳にする機会もあったのだろう。

白居家は、この広い木々の生い茂る土地にずっと住んでいる。

いつの頃からなのかわからない。それは、土地を切り売りせずともやっていけるような、才覚のある人物がいたというわけでもないらしい。森の家の人々は、腰の低い、大人しい一族だったと言う。江戸時代、幕末、明治、大正、昭和。動乱の中でも激動の時でも、この土地を失うことなく生きてこられたのは、偶然としかいいようがなかった。

それが戦後いよいよもうどうにもならなくなった時、嘉一郎の父忠保が婿に迎えられた。野心家で、強欲で、エネルギー豊富な人物だった。この森を手放すことだけはしなかったが、それ以外のことは何でもした。あちこちに持っていた借家は店子を追いついて売り飛ばした。あくどい商売も、金を傘に來た傍若無人な振る舞いもあった。何人も愛人を囲いそこに子もなし。そのうちの一人が笹原の祖母である。森の家の敷地こそ守られたが、結局ここに住む森の人々、忠保の妻や妻の親兄弟達は泣かされ続け、打ちのめされた。忠保本人だけが好き放題に生きて死んだ。

そして、その一子嘉一郎は、変人だった。本人の意志とは関係なく、母と父の異なる血が彼を翻弄したのかもしれない。

富子がふと、塀に張り付いた白い野薔薇に目を止めた。そこは角地で少しだけ塀が中に寄って、土地が空いている。

「こんな狭い所に家が建ってたなんて信じられないわね」
富子の言葉にタズは三十年前を思い出した。

「その上この花だけはまだ生きてて、こんな十月に花を咲かせるなんて、なんなのかしら」

確かに、5、6坪しかないようなこの土地に、家とは名ばかりの今にも崩れそうなあばら家があった。黒ずんだ玄關らしき引戸の上には、和紙を糊で貼り付けた『髪結』という文字があった。家全体が傾いでいて、部屋といっても土間の奥に四畳半が一間。それも畳は湿気を吸ってブヨブヨと沈む程だった。

外壁にはビッシリと白薔薇の蔦が絡み付き、季節が来ると一斉に花を咲かせる。風でも吹こうものなら、前の道は散った薔薇の花弁で白くなる。

誰も住まなくなった後、家は潰れた。何の風も吹かない日に、突然みしみしと軋んで、キヤラメルの空箱が潰れるようにペシヤンコになってしまったのだという。あの咲き誇る白薔薇が、住人の去ってしまったことを嘆いて、その家を引き摺り倒してしまったような気がして仕方なかった。

ここに住んでいた髪結い女は偏屈な人物で、晩年どんどん言動がおかしくなっていた。そんな女が行き倒れの親子を拾い、いっしょに住むようになったのである。拾われた女は、口もきかず、髪結いの女以上に頭がおかしかった。森の家の内儀が慈悲深い人物でなければ、三人は野垂れ死んでいただろう。赤ん坊が不憫だと、近所の嫌われ者であるこのあばら家の住人の面倒をよくみてやっていた。

その赤ん坊が仲野幸枝なのである。

幸枝を嘉一郎が娶った経緯などは、もう富子にとっては、猟奇事件といつてもいいような話に思えるのだろう。それこそ『私達凡人にはわからない世界』である。

タズは長年この屋敷に居て、多くのことを知っていたが、自分からいろいろ話すことはなかった。時というのは、流れていくだけで、たくさんの人生を、秘密を、恥部を、その流れの底に沈めている。穏やかな流れを波立てて、わざわざそれを川面に曝す必要はない。

「あつ、ちよつとお尋ねしますが、今のお話は髪結いさんのお家のことですか？」

突然後ろから、声をかけられた。二人は意味もなくぎくつとした。

「驚かせてすみません。住所からいくところらへんだったもので」

声の主はにこやかに話し掛けてくる。

ちようどその時三人を追い越して車が門の前に止まった。

「お帰りだわ」

それは葉子たちを乗せた車だった。

「行って頂戴。もうそろそろ、電車の時間だから、私はこのまま帰るから。その赤ちゃんが生まれる前にも、福島のうちの方にも遊びにきてよ」

「ありがとう、じゃあまた」

タズは挨拶もそこそこに車の方へ急いだ。車から降りた葉子

と笹原が門をくぐって行くのが見える。最後に明彦が付いて行く。タズの気配に振り返った。そして、離れて立っている富子に気付いて軽く会釈する。

明彦の瞳は、富子の横に立つ男が、彼女に話しかけるのを見ている。

明彦が玄關に入ると、伽耶子が出迎えていた。

「おかえりなさい」

(今、そこで富子さんを見かけたよ)

伽耶子に、明彦の目が捉えた映像が伝わる。伽耶子の表情が驚いた。明彦にはすぐに、富子といっしょに立っていた男のこどだとわかった。

(見覚えがあるのか?)

「姉さんを訪ねて来た人」

(何の用で?)

続いて入って来たタズを憚って、伽耶子は軽く首を振った。

明彦に声に出してしゃべるように促すのだが、明彦は自分がしゃべっていないことに気付いてもいない。

(何の用で訪ねてきたんだ!)

「姉さんたちは奥の部屋よ」

伽耶子はその場を誤魔化して、踵を返して廊下を歩き出した。

(伽耶子!)

明彦が後を追って、その腕を掴んだ。瞬間、伽耶子は氣を失った。

あの青い風景の中にいた。あれからずっとその意味を考えていた。言葉ではない何か。もつと原始的で中心に向かうコミュニケーションーション。地球をここからではなく、遠くから見つめる視点。自分に理解できる何かに置き換える必要があった。このせつかくのメッセージを理解しなければ、取り返しのつかないことになる。さらさらしたものが降り注いでくる。光の欠片が肌突き刺さる。仰ぎ見ると、虹が木々端微塵に飛び散っていく。

一瞬だった。伽耶子が、廊下に膝を付く寸前、意識は戻った。けれど、もう遅い。水を浴びせられたような明彦の表情。

「にいさん、違う」

伽耶子が取り繕おうとしても、明彦は逃げるように彼女から離れていく。

葉子の部屋まで追いかけて、伽耶子は明彦に追い付いた。

部屋には葉子と笹原がいた。

「まあ、珍しい。兄弟喧嘩」

葉子が二人の様子にゆったりと声をかける。もちろん、明彦の青ざめた顔を見れば、そんな類のものでないのはわかっていく。

「ごめんなさい、わたしが」

「わたしが…… どうしたの？」

途切れた伽耶子の言葉を引き継いで、訊ねる。

「氣を失いそうになって。兄さんを驚かせてしまったから」

伽耶子の返事はしどろもどろだった。

「妹が氣を失いそうになったので、驚いて、それを置いて逃げてきたわけ？」

明彦を振り向いて、揶揄するように言葉を続ける。

「明彦、鏡を見てごらんさない。今のあなたには、誰を助けることもできないわ」

明彦は何も言わず、ぷいっと部屋を出ていった。

けれど、近くにいるのはわかっている。彼は決して葉子の側から離れない。予見の日からこの半年、明彦はもう限界に近いのだ。傍目にも明らかかなほど、やつれてしまっている。お腹に明彦の子がいることを告げても、ほとんど反応しなかった。それほど、葉子だけしか見えていない。夜も眠れぬまま葉子の部屋を見詰めている。

その上、伽耶子の心が自分のせいで震え上がる所を見るのは、耐え難いだらう。今まで、他人と関われなかつた伽耶子が徐々に人の中に入っていくようになっていく。だのに今度は、明彦との関係が彼女を恐慌に落とし入れる。伽耶子が負の力にさらされることを防いできた明彦が、今、伽耶子の毒になっている。

「しょうがないわね」

葉子は、明彦の出で行った方を見遣って、伽耶子に振り返った。

「それで、実際はどうしたの？」

「兄さんが門の外で富子さんを見た……」

「まあ、東京に出てきているのね。タズさんに会いに来たのかしら」

「隣りに立っていた男の人が、前に姉さんを訪ねて来た人だったの。あの、お父様が自殺なさったって、あの、なにか、予言を信じたとかどうとかって」

伽耶子の説明を、葉子はすぐに呑み込んだ。

「自殺……ああ、九月だったからもう一年以上経ってるんだわ。

休場さんのご子息のことね」

「今ごろなんだろう」

笹原が口を挟んだ。

「でも、あの時明彦は会ってないでしょう？」

「私がわかったから、あの、その男の人…… 驚いてしまったんで、兄さんが誰なんだって！」

葉子と笹原に実感はないが、明彦の見たものがそのまま伽耶子の記憶に納まることは理解出来ていた。伽耶子の説明は、稚拙だったが、そのことなのだろうと察しはついた。

話を切り換えるように、

「今日はもういいわ。ちゃんと真っ直ぐ家にお帰りなさい」

葉子は笹原に言った。

「わかった」

やけに素直だ。

「休場さんのこと追いかけて行ったり、調べたりしなくていいわよ」

釘を刺した。

「……」

笹原は言葉に詰まる。

「凶星ね。私の身の廻りに起こったことはとにかくしらみ潰しに調べあげてる。あなたも明彦とたいして変わらない。そんなことじゃ、頼りに出来ないわ」

「そんなことって」

「疲れているのはあなたも同じ。一昨日、海老沢医院で弓子さんに会ったのよ。あなたとはもう一週間以上も顔を合わせていないって」

「余計なことを」

「余計なこと？ やっぱりそうなんだ」

「かまかけたのか！」

「これも凶星ね。弓子さんは余計なことを言うような人じゃないでしょ。とにかく今日は家に帰ってゆっくりして頂戴」

さすがの笹原も返す言葉がなかった。

「弓子さんとは、違うことを話したわ」

笹原の妻弓子は一回り以上も年下の葉子に、かしこまった返事をする。彼女にとつて葉子は笹原の信奉する教祖そのものだった。海老沢の蔑む目よりもこの方が苦手だ。

弓子は、友人の見舞いに来たと言っていた。病院のベンチで、

少し話をした。笹原が海老沢と飲んで、酔い潰れたことを聞いた。海老沢から、帰れそうもないから、家に泊めると連絡を受け、着替えを届けに行ったそうだ。

「海老沢先生とは仲がいいんだか、悪いんだか。絶対おまえのところになんか泊まらない、帰る、と言い張りながら、寝込んでしまつて」

弓子は、いつものおっとりした表情で笑つた。

「そう言えば『第三の男』って映画の題名でしたよねえ」

「そうですね。グラハム・グリーン原作の」

「海老沢先生と何を揉めたんだか、第三の男がどうしたこうしたつて、寝言でずつと」

「海老沢先生と映画談議ですか？ まあ、ありそうですね」

『植物のような人』葉子は弓子のことをそう評した。二十三歳の時、七つ年下の笹原と同棲。十三年後、葉子が現れて、三角関係になると身を引いて、姿を消してしまつた。それを葉子自身がわざわざ探し出して結婚させたようなものだった。誰よりも笹原を心配し、理解し、見守っている。彼女はきつと笹原が振り向かなければ、水の枯れたことも言わず、死んでしまうのだろうか、鉢植えの花のように。

「じゃあ、お疲れ様」

葉子は、そう言つて、笹原を廊下に押し出そうとして、立ち止まつた。

「あつ、それからね」

言葉を吟味するような間があつた。

「半年前、私が予見を話した時、友康に連絡してから、あなたに連絡したのはね、二度も説明するのがいやだったから。ちょうど同じ時間に来るなんて、なんて都合合つて思つたわ」

「今更、なんでそんなこと、海老沢の奴か」

「海老沢先生は私のこと嫌いだもの。話なんかしないわ」

葉子は微笑んだ。

海老沢には『妊娠を継続しますか？』と聞かれて『お腹の子は明彦の子よ。絶対に生むわ』と、思わず挑発するように答えていた。彼は、あからさまに葉子への蔑みを浮かべた。けれど、むしろそれも心地良い。

弓子の話、第三の男は、映画のことではないだろう。海老沢が笹原に言いそうなことは想像がつく。そう考えた時、あの瀬戸際で葉子がどちらの男を先に思い浮かべたか、笹原が気にしただろうと思いついた。こんな所も明彦と似ている。

伽耶子が一人になると、明彦が姿を見せた。

「休場つていゝのは何者なんだ」

と、尋ねる。

さっきの会話を立ち聞いていたのだろう。伽耶子に上手い嘘はつけない。一年前の出来事を説明するしかなかった。明彦はただ聞いているだけで、それに対して何のコメントもしない。けれど、伽耶子には兄がそれをどう受け止めたかがわかる。休

場は本当に納得して帰っていったのか、姉を逆恨みするようなことは起きていないのか。張り詰めて張り詰めて、後のない淵に立っている兄の心。そこには、暗い奈落から吹き上げる風だけが届く。

けれど、今、伽耶子には、もつと気を取られていることがあった。あの虹である。兄の変化。あの青い風景を理解する糸口。自分の記憶の何かに重ね合わせて手繰り寄せようと努力し続けた。あの虹はなんなのだろう。

自分の部屋に戻ると、伽耶子は聖書を開いてみた。抽象的な思念を言葉に置き換える為には伽耶子のイメージできる何かでなくてはならなかった。大洪水の後、神は空に虹を架けて、もう二度とこのようなことは行わないと人類に誓う。あの虹だ、と伽耶子は思った。あの虹が砕けた。伽耶子の知っている挿話を引くことよって与えられたメッセージ。『虹は砕かれた』誰が仕掛けたのなのだろう。人？ 神？ 約束された安穩は、破棄された。その刻印が兄の中にある。

狂　い　咲　く

友康が不安気に、木々を見上げる。十一月の終わりに庭の花々の蕾が膨らんでいる。何が起ころうとしているのだろう。

「キリストが生まれる時にだって不思議なことが起きたって言

うじゃない。私の子が生まれるのに、家の庭の花ぐらい咲いてくれたっていいでしょ」

葉子は陽気に言い放つ。

「君のその元気はいつたいどこから来るんだい」

笹原は溜め息まじりに呟く。出産予定日は二月二十四日、ちようど後三カ月ある。そして、もう予見の日から半年以上が過ぎてている。何が起ころかわからない、何事か身構える日常を維持することはむずかしい。そのむずかしさがみつく神経が疲弊していく。

葉子は着実に仕事を整理している。出産は良い言い訳になっていた。

明彦はもう、まるで人間でなくなってしまうたかのように、食べることも寝ることもぎこちなく、こちらが促さなくては出来なくなってしまうている。

「いいかげんにしなさい」

と、葉子に叱責されてやっと、彼女から目を離し、食事を口に運ぶ有様だった。

明彦は、さつき家の近くで車の中から、懐かしい顔を見た。

上司の前川だった。しかし、その隣りに立っていたのは、あの休場という男である。姉に恨みを残しているかもしれない男である。車を止めて追い駆けたかった。が、二人は止めてあった車に乗り込んで反対方向へと走り去ってしまった。

(どうということなんだ！)

じりじりとした思いが明彦を煽る。

解決しなかった。葉子の見た予見が休場のもたらす危難を指し示すものなら、それが解消されることによつて危難が消え去つてくれるのなら。刻一刻と姉を失う時間が近づいているという思いは、恐ろしかった。蛇の生殺しのように、試され続けている。明彦には耐え難かった。

家に帰ると伽耶子によつて一つの疑問は解けた。会社に置きっぱなしになっていた明彦の私物を前川課長がわざわざ届けてくれたのだと言う。伽耶子は、明彦には話さなかったが、品物を受け取る一瞬で、前川の近況を知っていた。数日前、離婚届に判を押し、会社でも配置換えになつて、締めくくりのつもりで、明彦の荷物を届けに来たのだ。

兄の中に、前川と休場が車で走り去る映像を見た時、伽耶子は姉への心配より、兄に不安を覚えた。兄の心が青さを増す。パンドラの箱の上には虹の欠片がどんどん降り積もつていく。何もかも初めから仕組まれていた。京子との出会い、別れ、それがスイッチ。破滅に染まる、一体、何が始まるのか。

夜、明彦は眠れなかった。姉が肌を許したのは、あの一夜だけ。葉子が望まなければ、二人には何も起こらない。そんなことは、もうどうでも良かった。友康も、笹原も、味方である。姉の思いが誰にあるうとかまわない。ただ、時が何に向かつて

突き進んで行くのか。見えない未来に苛立っていた。

姉の部屋にはまだ、電気がついていいる。友康は、戸締りに出たまま戻っていない。闇夜である。早く戻って欲しかった。

人影が過ぎった。中庭に入る家屋の途切れた所を誰かが通つた。

「誰だ！」

明彦の誰何に、影はかえつて足を速めた。

「どうしたの？」

姉の声。部屋の灯りが庭に射している。そこへ、人影が届くうとしている。

「待て！」

横顔が見えた。休場だった。

「待つんだ！」

障子が開いて、中の光が洩れてくる。姉が姿を現わそうとしている。体中の血が沸騰するようだった。息が止まった。

(待て！)

人影は、明彦の制止をきかない。

明彦の体は、心は、一気に姉の元へ向かう。

姉の立ち姿が障子に映る。

(この男は、忘れてなどいなかったのだ。ずっと姉を恨んでいた。機会を狙っていた)

明彦の心臓が、血管が、筋肉が、脈打つ。

(止まれ！)

明彦の思念は、自分の体を投げ打って、休場へと向かった。

明彦の声が聞えて、葉子は縁側に出た。走ってくる明彦の姿が目に入った。明彦の視線の先には、休場がいた。休場と目が合う。その瞬間、彼は一人で、もんどりうって、倒れた。

明彦の前に、伽耶子が飛び出す。

「だめ！」

伽耶子は明彦にしがみついた。

「兄さん、やめて！」

しかし、明彦は伽耶子を見ていない。倒れた休場へと向かう。友康が戻って来た。明彦の体を抱き止めた。やみくもに振り回される拳を握り締めた。

葉子は休場に駆け寄った。口から泡を吹き、体が痙攣している。タズが廊下に姿を見せた。

「海老沢先生を呼んで」

葉子が声をかける。

海老沢が駆け付けるには、五分もかからなかった。すぐに、休場の心臓マッサージを行う。どうにか息を吹き返した。

「こっちは大丈夫だ！部屋に寝かせておけ」

海老沢は明彦の方に向かった。友康が押さえていたが、興奮しきって暴れる男を押さえ付けるのは、並大抵ではない。硬直した腕の筋肉に注射針が折れた。海老沢が舌打ちする。友康を馬乗りにさせ、明彦のベルトをはずし、フックをはずして、ズ

ボンを下げた。葉子の目に一瞬、陽の当たらない白い内股に、銀の針が刺さるのが見えた。鎮静剤が入っていく。めちやくちやに振り回されていた手足は空しく宙をかき、やがて静まった。目が覚めると、休場は座敷に寝かされていた。誰もいなかった。

部屋を見回した。普通の和室だが、いい造りだ。(そうだ、白居葉子を訪ねて来たのだった) やつと記憶がなくなった。葉子の部屋の前で誰かに呼び止められた。迷った、が、とにかくに進んだ。葉子がすぐその部屋にいることは知っていた。闇夜で足元が悪い。つまずいたのだと思った。胸を棍棒のようなもので一撃され、頭に何か物凄く巨大なものが落ちてきて、潰される自分を感じた。意識はそこまでだった。殴られたのだ。いや、違う。自分の体のどこにも殴られた痛みはない。恐る恐る起きてみる。何ともない。服もそのまま、破れたり開けたりした様子もない。狐に抓まれた様だった。

腕時計を見た。まだ、十分と経ってない。

そつと廊下に出てみた。自分のいたのが、葉子のすぐ隣りの部屋だったことがわかる。ぐつたりした人間を、体格の良い男が腕に抱きかかえていた。心配そうに寄りそう少女とともに、葉子の部屋へ入って行く。その少し向こうの廊下で、一人の男と葉子が言葉を交わしていた。

「海老沢先生、笹原には言わないでね」

「何を」

葉子に海老沢先生と呼ばれた男は露骨にいやな顔をして答えた。

「あの人また余計な心配をするわ」

「昔話じゃ、かぐや姫は美しいお姫様かもしれないが、やってることは、男達を色香に迷わせて破滅させただけさ」

「大丈夫よ、どうせかぐや姫はいなくなっちゃうんだから」

葉子の視線が休場とあった。

「休場さん、大丈夫ですか？」

まるで何事もなかったように、彼女は微笑んだ。

「一体、何があったんですか？」

休場の問いに答えたのは男の方だった。

「あなたが庭先に倒れてたんで呼び出されたんですよ。海老沢といひます。すぐ、その医者です」

「なんていうか、突然胸を棒で殴られて、頭に何か落とされたような」

「以前にもこういう症状はありましたか？」

「いえ、まったく」

「心臓停止状態でした。頭に衝撃を感じたのは、酸素欠乏によるものでしょう」

「そんなありえない」

「医者に向かって、そりゃあ失礼な、暴言だな」

海老沢は苦笑した。

「まあ今、そんな元気ですからね。それは、僕に感謝することです。あなたの心臓を見事に立ち直らせたんだから。今晚、うちの病院に泊まりますか？」

「いや、それは…」

「じゃあ、明日、精密検査を受けに来て下さい」

休場は何か煙に巻かれているようだった。

「それにしても、こんな時間に突然葉子さんの部屋に向かうとは、どういうつもりだったのやら。あんな番犬がついているのに」

「私が頼んだのよ」

「おやおや」

海老沢は大袈裟なジェスチャーで答えた。

「じゃあ、僕はもう少し明彦君の様子をみてから帰りますよ。どうせ、入院しろ、といつてもだめでしょうけど。疲労困憊。彼の体の方が余程あぶない」

男が行ってしまうと、葉子は休場に部屋へ戻るよう促した。

「すみません」

「すみません」

二人同時にその言葉を口にした。

「こんなお世話をかけておいてなんなんですけど、別に持病がある訳ではないです。健康なはずなんですけどなあ」

葉子を訪ねて行く途中で疾患によって倒れ、騒動になった、

と理解するしかなかった。今こんなにびんびんしていることを変だとは思っても。

「こんな風に呼び出した私もいけなかったんです」

葉子は艶然と微笑む。

とりあえず、頼まれた調査書を渡すと、現金の封筒を手渡された。かなり分厚い。

「領収書用意してませんでした」

休場の返答に

「じゃあ、次回に」

葉子が現金の封筒を取り上げる。

「あつ、はい」

休場が答えると

「うそ、いりませんから、領収書。あなたも確定申告なんかしないで下さいね」

葉子からかわれているのを感じた。が、いやな感じではない。こんな所が人に好かれるのだろうか。

「弟さん、どうかなさったんですか」

休場の曖昧な質問に

「あなたが倒れたのを見て、動転して倒れちゃったのよ」

「すみません」

「うそよ」

今度はケラケラという声をたてて笑った。

「過呼吸症候群、あなたのことと偶然いっしょになっちゃった

だけで、心配ないし、もちろんあなたのせいではないわ」

初めてこの家を訪ねた時と同じだった。結局、葉子のペースに乗せられて終わってしまう。

休場を帰して、自分の部屋に戻る。海老沢はすでに帰っていた。明彦の側に伽耶子が、部屋の隅に友康がいた。から元氣だった。体質的なものなのか妊娠七ヶ月というのに、お腹が大きいいことはほとんど分からない。けれど、今日はさすがに疲れた。お腹の重みを感じていた。

休場がタズに話し掛けたあの日、笹原を帰してから、葉子は自分で休場のことを調べ、連絡をとった。何度か電話でやり取りをしている。葉子は休場を信頼できる人物だと感じていた。でなかったら、こんなことは頼めない。自分たち三人の出生についての調査。それは場合によっては、知らないほうが良いものであるかもしれない。その時は自分がその秘密を持ったまま逝けばよい。

隠れて調査結果を受け取ろうとした。出来れば、話もしたかった。自分と休場の間には、これからの運命の糸が繋がっている。そんな思いがあつたので、安易とは思ったが、休場を呼び出した。それが、最悪の結果を招いてしまった。

海老沢には気付かれなかっただろうか。十年前、父の死んだ日に駆け付けてくれたのは、海老沢の父親だった。海老沢自身はあの日の様子を知らないはず。

(今日と同じだった……)

十年前葉子は、今休場に説明したように、自分自身にも言い聞かせた。心筋梗塞。

(突然ではあるけれど、病死なのだから)

伽耶子もいた。友康もいた。彼らはどう思っていたのだろう。そして明彦自身は……。

「これが、明彦の力なの？」

じっと俯いたまま、伽耶子も友康も押し黙っている。

「明彦の作業なのね」

明彦の作業……それは何を指して言っているのだろうか。

「お父さんの死んだ日のことを覚えてる？」

やっと伽耶子が肯く。まざまざと脳裏に蘇える。暑い日だった。二十歳の葉子は父と言いつ争っていた。父は家の権利書を手

に持っている。この森を売り払おうというのだ。

「お願いだから、やめて」

葉子は懇願した。この森がなければ、伽耶子や明彦は生きて

ゆけない。自分には未来が見えている。自分の直感こそ、間違いない真実だと思っていた。けれど、それをどうやって人にわからせることができるのか。

「お父さん、お願い」

葉子にはそう繰り返すしかなかった。葉子の後ろには、友康が立っていた。しかし、父は人の話を聞くような人物でもなければ、家族を気にかけるような男でもなかった。葉子を押し

け、友康を突き飛ばして、廊下へ出て行った。そして、倒れた。威きり立って振り上げた手もそのままに。電池の切れたロボットのよう。さっきの休場のよう。

慌てて廊下に出た葉子は、廊下のはずれに、明彦と伽耶子の姿を見た。

「海老沢先生を呼んで！」

あの時も葉子はそう叫んだ。

先代の海老沢の方が藪だったわけでもないだろうが。父は助からなかった。心筋梗塞で亡くなった。

廊下の隅にたたずんでいた十歳の伽耶子と中学生になったばかりの明彦。もう百七十七センチになろうとする背丈とは、アンバランスな若い少年の輪郭。

医師が父の死と死亡時刻を告げるのを、葉子も伽耶子も友康

も覚めた目で見っていた。三人は泣かなかった。明彦だけが父に取り縋って泣いた。

「父さん、父さん」

死者を取り戻そうとするように呼んでいた。

意外だった。父は子どもには興味のない人だ。特に明彦に対して冷たかった。葉子は父が明彦を憎んでいると思っていた。

だのに、明彦だけが悲しんだ。

明彦の異常に気付いたのは海老沢医師だった。

「明彦君」

後ろから、両手でその肩を掴んだが、全く聞こえていない。

呼吸が荒く、体が震えている。さっきのように暴れこそしなかつたが、医師は鎮静剤を打って、寝かしつけた。

「姉さん、兄さんは誰のことも死んでいいなんて思っていないの」
唐突に伽耶子が話し始めた。

「さっきも休場さんを止めようとしただけ。姉さんを守ろうと
しただけ。わかってあげて」

葉子は頷いた。伽耶子は続ける。

「そして、十年前のことは、違う。兄さんじゃない。だって、
兄さんだけが、父さんのこと好きだった。あんな人だったのに、
兄さんは父さんに愛されたがってた」

そうかも知れない。明彦だけが父を理解していなかった。

「この家で一番父さんを憎んでいたのは、あの木よ」

伽耶子の視線が外へと移る。

「この木は自分で自分の身を守るんだわ」

葉子は伽耶子の言葉を本当でもあり、うそでもあると思った。

桜

台所口から友康が小学校二、三年生ぐらいの男の子を連れて
入って来た。話をしていたタズと葉子が振り返った。

「あら、さっきの子ね。駄目って言ったでしょ」

タズに見咎められて、子どもは友康の後ろに隠れた。どぎまぎ
した表情で顔を覗かせる。

「ちよっと、そこらへんに」

子どもに代わって、友康が答える。(しようがないわねえ)と
言わんばかりのタズの横を通って、二人は中庭の方の戸口から
出て行った。

「なに？」

葉子の問いに

「近所の子なんですよ。なんでも飼ってたハムスターが死んで
埋めさせて欲しいって。全くこのウチを何と勘違いしてる
んだか」

「このごろは、土がないから、そういうのは大変ね」

「さっきまで、学校に行ってる間に死んじやったって外でべそ
べそ泣いてたんですよ」

「タズさんじゃ、追い払われちゃった訳ね。友康が通って良
かったこと」

やがて、友康と少年が戻って来た。

「動物は大事な人の前では死なないんだよ」

友康が子どもを慰めている。

「気がすんだ？」

タズの問いに子どもは「ふん」といった表情である。そのま
ま戸口に行こうとして、そのすぐ脇にいる人物に初めて
気がついた。一瞬、はっとかたまった。そして、そっとその脇

を通って行く。

「ほらほら、恐がられてる」

葉子がおもしろそうにからかっても、明彦はなんの反応もしない。暗い隅で、葉子を見ているだけだ。葉子は、中庭へ出た。

十二月の外気が頬を刺す。そろそろ暮れ始めている空の赤さが眩しい。気持ち良かった。

「あっ」

葉子は少し背伸びをした。そして、振り向きもせず話し掛ける。

「ねえ、今、杏の花が咲いたわ」

明彦は、どうせ、すぐ後ろにいる。

「池の向こうの杏の木も咲き出したわ」

遠くに視線を投げたまま、葉子は呟く。

明彦には、姉の話す言葉も耳に入らない。ただ姿を見つめている。背伸びした姉は、鳥に似ている。少し顎を上げると長い首がすつと伸びた。空の高みを指すかに、見えてしまう。

「取ってきて」

突然振り返られて、明彦はふつと我に返る。

「池の向こうの杏の花が咲いたから、取ってきて」

葉子は、もう一度繰り返した。

「こつから、見えないだろう？」

弟は気のない顔で答える。

「あら、杏の花はね、咲く時、ポクンって音がするからわかる

のよ」

姉の目が悪戯っぽく笑う。

「うそだ。音なんてしない」

「じゃ、見てきてよ。それで、一枝手折って来て」

「いやだ」

「いいわよ」

葉子は歩き出した。明彦も付いて来る。

「だからね」

姉は、くるりと振り向く。

「どうせ、私が行けば、付いて来るんでしょ。私は妊婦なのよ、ここで待ってるから取って来てちょうだい」

こうなったら、とても姉には勝てない。不満そうに頷くと、明彦は走り出した。姉の姿が見えなくなる前に二度後ろを振り返った。

明彦の姿が見えなくなった時、葉子は流れ出す水を感じた。子宮から地面へ。

「タズさん！」

座り込む葉子に、友康が駆け寄る。

「破水したの、海老沢先生を呼んで」

明彦は姉の言葉が本当だと知った。この庭のあらゆる花が自分の季節を忘れて、咲こうとしていた。

(美しい……、吉兆？ 音をを寿ぐのか？)

明彦が近づくと、花は散った。明彦は怯えた。今、そこに咲いている杏の花も幻のようにあやうい。隣りの枝へ、明彦が手を伸ばす。花は逃げるように散って行く。その隣り。その隣り。明彦が手を伸ばしたその瞬間に花卉がほくりと落ちる。辺りを見回す。花はすべて咲いている。明彦を誘って、咲き競う。手当たり次第に花を追う。地面は散った花卉で染まる。白く染まる。隣りの木へ走る。枝によじ登る。花々は満開に咲き誇り、明彦が手を伸ばすと散る。明彦を嘲笑う。明彦の強暴な牙をなじるように落ちて行く。

突然、闇に落ちた。

捕虫網を持って、蝶を追った日。蝶を見失って、野っ原で立ち尽くしたように、明彦の動きは止まった。辺りは、すでに闇に包まれている。どれほどの時が過ぎたのか？ 陽は完全に落ちていく。なぜ、こんなに長い間、葉子の側を離れてしまったのだろう。なぜ、一時でも葉子を離れたのだろう。一体、自分は何をしてしまったのだろう。

どくどくと心臓が打つ。頭の中で、脈打っている。走り始めた。息を吸うのも忘れて。吐くのも忘れて。

わかっている。花は共犯者だ。

わかっている。友康が子どもに話していたではないか。

『動物は大事な人の前では死なないんだよ』

わかっている。姉は未来をはずさない。

でも、この未来だけは、いやだ！ この未来だけは認めない。

一刻も早く姉の姿を見るのだ。姉の傍らへ。姉の元へ。

離れが見えた。中庭を走る。縁台を飛び上がり、障子を引き開けた。

姉は布団に寝かされていた。聡明な白い額、細い顎。閉じられた瞼。瞼の中にあの視線がある。今も真っ直ぐに、天井を突き抜け、宇宙までも見つめる視線。

「あきひこさん、あきひこさん」

タズがそう言いながら、縫い付く様に手を引く張った。

しかし、明彦はタズに視線を落とすことも、姉の傍らに膝を折ることもしなかった。硬直したまま立ち尽くす。葉子を見つめ続ける。視線を外すことなどできない。

廊下の襖が開いて、赤ん坊を抱いた看護婦が入って来た。それを見た途端、タズが堰を切ったように泣き出した。葉子の用意した産着を着た赤ん坊は猫の子のように泣いている。

明彦の視線がそちらへ移った。

(お前が殺したのか！)

刹那、伽耶子が動いた。赤ん坊を看護婦の手からもぎ取る。そして、廊下へ転がり出た。看護婦はその場に倒れた。海老沢が駆け寄る。即死だ。何が起きたのかも分からなかったろう。

心筋梗塞、いや、その胸は変形するほどの力を受けていた。

玄関の戸が鳴った。笹原だ。葉子の名を呼んでいる。

伽耶子は赤ん坊をタズに預け避難させた。部屋に戻る。

笹原が部屋に入って来た。葉子の遺体に跪く。何も言わない。声もない。海老沢が肩に手をかけた。笹原の横顔を見た。その瞬間、手は肩を離れていた。

笹原は、泣いていない。表情もない。見開かれたビー玉の目が、葉子を見ている。目を逸らさない。逸らせない。眸が葉子をつらえている。捕らえながら、見ることを拒んでいる。何もかもを拒んでいる。海老沢の手も拒絶されている。

友康と明彦の姿は庭にあった。夜の庭は、月と満開の桜に映えた。明彦は吼えていた、狂った獅子のように。野獣の眼光が閃く。

雲が流れ出した。フィルムを早送りするように飛んで行く。明彦の苛立ちが空気を震わせる。木々が呼応する。枝がザワザワと騒ぎ、幹までもが鈍い音で揺れる。砂が、花卉とともに舞い上がる。

もはや何も見ていない、見えていない明彦の目は、何かを追っている。ゆるゆるとした緩慢な動作で、部屋へ戻って来る。手負いの羆のような殺意に満ちて。押さえきれない逸脱した力。友康は明彦を引き止めようと組み付いた。後ろから羽交い締めを抱きつく。

しかし、そんなことは歯牙にもかけず明彦は縁台に上がって来る。友康は渾身の力で、縁台のふちに足をかけ、明彦を上らせまいとする。明彦は、体を振った。友康を振り落とそうとする。友康の手は離れない。獣じみた咆哮を繰り返しても、どん

なにがあいても、その手は外れない。

猛り狂う明彦とは正反対に友康は一言も発しない。ただ、ただ、明彦を後ろから両の手で、押さえ続けている。

笹原が、明彦が、すべてを失ったと感じるように、友康にも葉子がすべてだった。泥の鎖をつけられて、生まれてきた。ずぶずぶと地底に沈んで、そこから世界を見ていた。廻りには、泥の幕があつて、生きていくことから隔てられていた。

葉子だけが、すぐ横に立っていた。『あなただからこそ、救われるのだ』と言った。

(彼女を愛おしむ、彼女を哀しむ、その生も、死も)

明彦は背に打たれた楔を、削ぎ取ろうとするように桜の古木に背を押しつけた。友康の服は破れ、背中の皮が剥がれて血を流した。それでも、呻き声一つもささず、猛り狂う明彦を抱き続けている。苛立った明彦が再び後ろに跳んだ。背を打ち付ける。ドーンと桜が揺れた。花卉が一斉に散ってくる。今まで、一言も発しなかった友康の口から呻き声が漏れた。桜の枝が友康の背に突き刺さっていた。明彦がもう一度体を振るう。ドクドクと血を流し、すでに両の腕に力をこめることも出来ない体で……それでも、友康は手を放さなかった。

伽耶子は兄の心の中のパンドラの箱が震えているのを見た。蓋がパタパタと音をたてている。開けばすべてが終わってしまう。虹は砕かれた。誰も約束を覚えていない。

外の騒ぎに見向きもせず、葉子を凝視し続けていた笹原が、葉子を抱き上げた。そのまま歩き出す。そして、縁台に立つと、向かってくる明彦に対峙した。

「葉子は死んだんだ」

葉子の亡骸を抱いて、現実を抱いて、笹原は立ちほだかる。

「お前のせいで、葉子は死んだ。お前の子を生んで死んだ」

無表情な顔。無機質な目。明彦こときの絶望を嘲笑う闇が、笹原にはあつた。

明彦の視線が葉子を捉えた。眸に葉子が映る。

（死んだ）

そこにいる姉はすでに杏の一枝を欲しがった姉ではない。

（死んだ）

すべては終わった。

（死んだ）

すべては無に帰し、取り戻せない。

風は止んだ。雲は止まった。沈黙が戻る。死者の上に桜の花が降る。

雲間を、月の光が降りてくる。明彦を照らす。静寂。筋肉が弛緩した。友康が手を放すと、その体はゆっくりと前のめりに倒れていった。倒れながら、不思議そうな表情で桜の花弁を見

ている。

桜の木の下で母を待っていると、一人の少女が近づいてきた。前髪を眉の所できっちり切りそろえたその少女は、明彦に手を差し伸べた。尻込む彼に、彼女は微笑む。

「ここにいるいいよ。だいじょうぶ、ちゃんとわたしがついてるから」

明彦の体は地面に投げ出され、意識が遠のいていく。それでも桜の花弁は目の前を舞う。

「やくそくしたのに、ねえさん」